

We

5
2005

特集

止まらない
バツクラツシユ論争



【インタビュー】竹信三恵子さん
「温室フェミ」からの脱出

不平等を産み出すジェンダー構造の働きを鋭敏に察知して迅速に反応する教育
—バーバラ・ヒューストン論文の「本当」の内容—
沼崎一郎

発行 全国不登校新聞社

Fonte

Fonte(フォンテ)はラテン語で「源流から」の意味。
本紙は不登校を中心テーマとしながら、
虐待や発達障害の問題など、
広く子どもに関わる問題を取り上げています。
ひきこもりやニートなど若者の問題も含め、
当事者の声を中心としています。

ONLINE SHOP

ホーム 商品カテゴリ 特定通販地区に集約く委託

全国不登校新聞社オンラインショップ

商品カテゴリ

ご希望の商品カテゴリを選択してください。

新聞購読

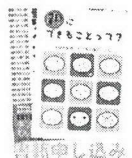
Fonte 定期購読のお申し込み、バックナンバー販売。 ※送料は
価格に含まれています。

[商品一覧ページへ](#)

書籍

不登校新聞社で刊行した書籍です。 ※送料別途。ただし、定期
購読と併せてご購入の場合は送料無料。

[商品一覧ページへ](#)



オンラインショップも開設しています。

<http://www.futoko.org>

■大阪編集局 〒537-0025 ■東京編集局 〒162-0065 ■名古屋支局 〒464-0036
大阪市東成区中道3-14-15 新宿区住吉町8-5 名古屋市千種区本山町2-33-1
TEL 06-6978-6615 TEL&FAX 03-5360-1231 TEL 052-759-2375
FAX 06-6978-6626 mail to: tokyo@futoko.org FAX 052-759-2376
mail to: osaka@futoko.org mail to: nagoya@futoko.org

毎月1日・15日発行/購読料金 6カ月4800円
郵便振替口座 00100-6-22077 全国不登校新聞社

特集

止まらない バックラッシュ論争

[インタビュー] 竹信三恵子さん 2
「温室フェミ」からの脱出

不平等を産み出すジェンダー構造の働きを鋭敏に
察知して迅速に反応する教育

～バーバラ・ヒューストン論文の「本当」の内容～

沼崎 一郎 17

ジェンダー・フリーは素敵な日本語
ある男性の視点から

足立 広明 25

■女と男の家庭科新時代

新・オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎 30

□授業実践□ 家庭科 風がかわる 匂いがかわる

「ミッフィーのおばあちゃん」から
「死」を考えよう 浅井由利子 31

「らしさ」からの解放をめざして
～ジェンダーの視点のある授業 (2) 「男らしさ」の授業 柏木 修 36

“覚醒”と“自立”のための「ジェンダー論」
一女子大での教育経験から 第17回 母性本能はない 沼崎 一郎 40

「ひまわり」の日々 (12) 案ずるより産むは難し 入江 一恵 44

■連載

魚沼の地から (2) 黒岩 秩子 46

わがまま映評 (22) 『きみに読む物語』 満田 康子 48

乱読大魔王日記 (62) 冠野 文 50

続・ひげのおばさん子育て日記 (2) 未熟な親 中畝常雄・治子 52

Gender Free Breeze (10) ジェンダーおやじ 三浦 純子 54

リレーエッセイ【地方からの発信】 (2)
高知から「ピンチをチャンスに変える力を！」 木村 昭子 56

ひと・まち・NPO (2) 桜の下のリアル 西川 正 58

女が歳をとるとということ (92) 父と娘 木村 栄 60

●読者のひろば 61

●編集後記 63

表紙・イラスト 川口民子

□インタビュー（聞き手・まとめ／稲邑恭子）

「温室フェミ」からの脱出

竹信 三恵子さん

（新聞記者）

この間のバックラッシュ論争の中で、女性学の研究
者、女性運動、現場の教師の間で情報が共有されてい
ないこと、そして女だけでやっていることの限界を痛
感した私。「私にも言いたいことがある」という竹信
三恵子さんの言葉を思い出し、「北京+10」から帰国
直後に訪ねてインタビューした。

「フェミニズムには可能性がたくさんあるのに、日
本の土壌の中で、それらを生かせるように道具として
鍛えられていない」という竹信さんの言葉を聞いて深
く納得。現状をどう打開すればいいのか、を探ってい
きたいと思う。（稲邑）

●男なら力を持てるのか

稲邑 竹信さんは「温室フェミ（ニズム）」が問題
だと言われるけど、それはどういう意味で使われるの
ですか？

竹信 私は、本来は「フェミ論」はあまり好きじゃ
ないんですよ。自分がフェミを論評できるほど立派
なフェミニストではないのはわかってるし、フェミ
を論じるより仕組みを変えるための方策を考えたい方が
生産的、という気もしていたので。ただ、最近、日本
のフェミニストの発言を聞いていて、「あれ？」と思

うことが増えてきた。これまでの女性問題の枠組みの中だけで女性問題を論じている感じで、冷戦後の激変してしまった社会に対応できていない。言ってみれば、現実の社会の冷たい風を避けて、架空の戦後的な枠組みに浸って、ぬくぬくと物事を論じているのでは、という気がするが多くなってきた。「これって温室の中のフェミでは」と、心配になってきたわけです。

稲邑 それは具体的にどういふ発言をさすのですか？

竹信 たとえば、「女は被害者、男は敵」とかいふ言い方がありますよね。男性から女性への搾取構造はやはり現存しているので、こうした言葉が有効な場面はもちろんまだまだたくさんある。だけど、一方では、男性の中の階層分化もすごい勢いで始まっていて…。「男も大変なんだから性差別とか言ってる場合じゃない」などと言いたいのではなく、こういう紋切り型の言葉では、いまの社会状況の分析が適切にできず、問題も解決できない、という危機感がある。

稲邑 男性の同年代の中での格差も大きくなっていますよね。

竹信 女性の間でも男性の間でもそれぞれ格差が広がっていて、年配の男と若い男の間の経済的・文化的

格差もものすごく大きい。最近では性差より世代差の方が大きい場合も少なくない。だから「男性は敵」では方針が立てられない。同じ「男性」でも、圧力をかけて何かを取れる男性と、鼻血も出ないという男性がはつきりしてきた。八〇年代くらいまでは、日本の企業は「世帯主である男たちはクビにしない」と、建前としては言っていた。政府が、男をおだてて稼がせて、女性と子どもに一部を割り戻させ、代わりに女性に育児や介護、地域活動といった無償労働を担わせて社会福祉費用を節約させる仕組みを推進してきたのが戦後の日本です。浮いた公的資金は産業育成に投入して、産業が膨らめばその分け前の一部を男に下げ渡し、男は女と子どもにさらにその一部を下げ渡す。だから、政府も、一応は男性全体の存立基盤を安定させようとしてきたわけです。そういう状況では、女は男に対して、かなり安心して「あんたが悪い」「あんたが何とかしろ」と言えた。男も、言われると、しようがないかなとお金を出したり、責任をとったりした。

だけど、いまは、男そのものに分解が起きているために、そういったものを担えなくなった男性が続出している。政策そのものも、建前としては男に「担え」と言い続けているにもかかわらず、実際に担えるよう

な賃金体系は放棄した。成果主義で男性間にも大きく差をつけると言っているし、リストラで解雇もあり、家族手当も廃止すると言っている。こうした変化に応じて女性が自立していくような措置を政府がとっているかという点、ほとんどしていない。低賃金で自立できないような非正規雇用の女性を増やし、いまは働く女性の半数以上がこうした働き方になってしまった。政策決定者の中に矛盾がある。だから話がややこしくなっている。男が養えなくてもしょうがないから女の底上げをするとか、女性が自立できる仕組みをつくるというなら、話はもうちょっと簡単なのだけど。

場合にに応じて使い分けをするんですよ。家父長制は維持しつつも、そのための原資は男に与えないので、非常に複雑です。そういう意味で言うと、男をひとまとめにして、そこから資金を出させるとか、「敵」にするとか、という女性運動のパターンではもうもたない。若い世代の男性の中には、これまで以上に逆切れしてくる層が出てくるのではないのでしょうか。逆に言えば、家父長制をやっている、もう男にさえ得にならない、という形で構造変化を説明し、男性を取り込んでいけば、もう少し早く変えられる部分があると思う。

●女性学の功罪

竹信 こういうことを強く意識したのは、ある大学の女性学の講座に助っ人を頼まれて行ったときに、「女性学の先生の言うことが納得できなかったので、違う人の意見を聞いてみたかったので来ました」と何人かの学生に言われたからなのね。

稲邑 それは男の子ですか？

竹信 男女ともに、です。男の子に賃金の高い仕事や正社員の仕事が多いのは相変わらずですが、一方でフリーターをやるしかないという層も増えている。男だからといって、さほど経済的にも恵まれていないと感じ始めている。同時に、変にやさしくなっているの、男性は女性を傷つけるものだ、なんてことを耳学問で聞いている男の子も増えてきた。それなのに、授業で「男は女にとって悪だ」と言われてしまったと悩んでいた。フェミニズムってそんなものなんですか？と聞くので、こちらも困ってしまっただけ。「男に資源が集中する」という戦後的な常識と、フリーターにしかなれない自分との落差に戸惑い、「そんなこと言われても……」と反発したり、疑問を感じたりになってしま

う。

稲田 女子学生は？

竹信 就職などで差別は相変わらず感じるでしょうが、日常の中では男がそんなに強いとは思えないでしょう。性をめぐっては相変わらず「ボーイフレンドに遊ばせてと言えない」とか、男女の力関係の差が相変わらず根強い部分がある一方で、男性の立場の弱さ、経済力が落ちていることは、わりに敏感に察しているのではないかと。「男全般」対「女全般」の仕分けをもう少し慎重にして、ターゲットを絞り直していかないと、問題の所在がわからなくなってしまう。

先日の国連の「北京+10会議」で出会った二〇代のNGOの職員の女性が言うには、国際協力をしたかったが、女性問題には関心がなかった。「女性学の先生が怖かったので、何となく敬遠していた」というわけです。フェミニストはコワイというのは、男性が流した偏見とデマだと思っていたのですが、よく話を聞いてみると、理論的に整合性のない学生を理屈で言いまくって追いつめたり、学問的な優位性で決めつけたりとか。性にまつわる身近な問題を解決することより、勉強ができる、できないの優劣敗みたいところが怖かったと言っていた。実際に国際協力の仕事をして、

国連の女性関係の会議に行ってみたりして、初めて、女性差別の開発への影響など、差別の実害を思い知り、フェミニズムに近づいてもいいかな、という気になったと言っています。

いい先生もたくさんいるので、決めつけはどうかとも思うのですが、こうした体験をあちこちで聞くようになったのは事実です。フェミニズムというのは、家父長的な垂直的な権力関係を水平的に変えていくとか、権力のあり方自体を組み替えてしまいくらいの力があると私は思っている。そこに展望があるのに、必ずしもそうならないようだと心配になってきたんですよ。これも、理論的優位性や論争の中の優劣など、学問の世界の温室の中で「フェミの出来、不出来」を競って、実際の権力関係を変えろとか、私たちの人生に必要なことに取り組む姿勢がどこかへいつてしまう。「温室化」の一例ではないかと思えます。

稲田 そこは非常に弱いかもしれない。日本だけじゃないのかもしれないけど、とりあえず日本は…。

竹信 大学に女性学講座ができたことで、若い人が離れてしまうとしたら皮肉ですよ。

稲田 確かに上昇志向や権威主義的なところが出てきたことは否めないと思います。

● 尊厳を失わず、稼いだ賃金を使ってどう自立するか

竹信 「学」とか「理論」になっちゃうと、論で勝ったほうが勝ち、という優劣の世界が前面に出てきてしまうのかも。運動は、仕組みをどれだけ変えたかだから、論の勝ち負けより実効性ですよ。包容力とか、運動する人の人格力も重要になってくる。「優勝劣敗」じゃ通用しなから。もうひとつ「温室化」を感じたのは、女性が会社などに入るといろんな目にあうでしょ。こうした現実の世界の苦しさを乗り切るのに、フェミニズムがとて役に立つんだ、ということも十分伝えられていない。

稲昌 あ、それは言える。

竹信 地域の主婦講座にいったら、会社に総合職で入ったんだけど、仕事をやめて専業主婦になったという女性が最前列に座っていた。「会社をやめなければよかった」というので「なんでやめたの」と聞いたら、「バブルの後期で就職の時が楽勝だったから、仕事なんてやめてもいくらでもあると思ってた」という。仰天しました。大手の日本企業は終身雇用で、入った人はずっとやめないことを前提に経営が成り立つ

てきた。最近になって、やっと中途入社も増えてきたけれど、これまでは、空席ができないために、一度やめると途中から入るのは大変だったんですよ。景気がよければ女性でも入るのは何とかなるんですけどね。だから、入ったら次の具体的な展望ができるまでは何とか続けよう、が働く女性の鉄則だった。それでも嫌がらせをされて、泣く泣くやめざるを得ない人が多くて、これをなんとかしよう、というのは男女平等等の大きな課題だったわけですよ。七〇年代に学生だった私たちでも、就職した先輩をつれてきて自力で講座を開いたりして、その程度の情報は持っていた。

日本の企業は基本的に家父長的な経営だから、女は自我がメタメタにされちゃう部分があるんですよ。それにどう対応するかという解決法をちゃんと植え込んでおかないとやっていけなくなってしまう。会社に対して過剰適応して極端に自分を抑え込んでしまったりか、逆に自分自身が家父長的な「オヤジ女」になってしまうとか。一般職の女性が、結婚すれば自分を支配する男はたったひとりだけど、会社にいると複数のおやじに仕えなければならぬので結婚のほうがまし、と言っていた。これは、非常にわかりやすい。こうした構造をどう理解し、女性が自分の尊厳を失わないよ

うに対応するかは、とても重要な課題なのですが、この準備がないまま会社に送り込んでいます。だから、就職すると、女性が精神的に自立できずに、むしろ「女社畜」になって支配されてしまうことも多い。これは「稼いだ賃金を使ってどう自立するか」を教えないからなのです。

稲邑 サバイバル方法を教えないわけよね。

竹信 自立ってサバイバルでしょ。経済的自立って、もちろん、そこそこお金を稼ぐことが最低限、必要だけど、それだけではないからね。銭がなければどうしようもないけど、そのためにいろんなことに卑屈に追隨して自分の女性としての尊厳をめちゃめちゃにされても我慢するだけなら、それは自立といえない。経済的な自立というのはまずお金を稼ぐこと、次に、そのお金をどう使って、尊厳を踏みにじられている現状を変えるのか、なんです。なのに、経済という借金儲けとしか思わない。そのお金で現状を変えてくれそうなのをNGOを支援するとか、税金として払って政府の使い道に口を出すことで政策を左右するとか、財政のコントロール権まで含んでいる。そこまで含めての経済的自立だということが教えられていないので、せいぜい稼いだお金で買い物症候群になるくらいしか解放の道

を見出せない。こうした問題に正面から取り組まないのは、フェミが現実に竿さしていくことを避けているという意味で、やはり温室化ですよ。

これは「フェミニズム批判」でも、「フェミ離れの提唱」でもありません。「フェミニストにまで批判されるフェミニズム」なんて見出しをつけてうれしがっている人たちがいるので一応言っておきますけど。言いたいのは、フェミニズムには可能性がたくさんあるのに、日本の土壌の中でそれらが生かせるように道具として鍛えられていない、温室の中での言葉遊びや、頭の良し悪しを競うゲームになってしまった部分があるということ。しかもこの方が、現実との衝突がない分、読み物などの商品として消費しやすいこともあって、流通もしやすい。その結果、難しい「論」がフェミニズムの主流であるかのように思いこんでしまう人が多い。これは、もつたいたいと思うのです。

●北京十10女性会議でみえてきたこと

稲邑 私は女性運動の状況がいま八方塞がりだという気がしているのだけど、竹信さんは、これからどういうところに力を入れれば展望が見えてくると思いま

すか？

竹信 三月の「北京+10」の国連女性会議に出て心強かったのは、国際的な女性NGOの現状分析が、それなりにきちんとできていることでした。海外の女性NGOも行き詰まりとか、硬直性とか、いろいろ問題は指摘されていて、完璧からはほど遠いといわれていますが、政治というか社会運動というか、そうしたものがフェミニズムの中核にあるからではないでしょうか。国際NGOの女性環境開発機構(WEDO)は、会議が始まる前から一五〇カ国の女性NGOに「北京行動綱領の自国の達成度」のアンケートを行い、実践的な評価をまとめています。これらの結果をみると、ひとつは、北京行動綱領を採択したことによってかなり進んだ部分はあるということを一応評価している。何が進んだかという点、男女平等の推進があらゆる問題の解決に重要な役割を果たしているという認識では、各国の政策担当者がほぼ一致した、ということが確認された。その象徴として、政府の中の男女平等の推進を担当する機関(ナショナル・マシーナリー)が、かなりの国で整えられてきた。女性差別撤廃条約の批准国も一四六カ国から一七九カ国まで増えた。それから女性議員三割以上の国が一四カ国に達した、とも議

場で報告されてきました。これらの数字が挙げられた理由は「まだこれだけしか達成していない」というマインスの意味でだったのですが、北京女性会議で目標を決めた結果、着実に増えてはいる。北京会議以後、選挙制度を変えて女性国会議員の数が減ってしまったような日本と比べると、これはすごいことだと思ふ。

日本社会にみると、男女平等とは各人が個人的な努力で自分のライフスタイルをチマチマと変えていくこと、と思わされがちです。それこそ「個人生活という温室から出るな、出たらバッシングにあうぞ」というメッセージなんです。でも国際社会では、政策や政治によって男性のみに資金や権力が流れ込んでいく仕組みを変え、各人が対等に資源を分け合って、平等に生きていける枠組みをつくるのが結果的に社会の繁栄につながるという認識が定着しつつある。これは頼もしいですね。

ただ、そのWEDOが同じ報告書で、とはいえ、問題解決にはほど遠い、と指摘している。そもそも報告書のタイトルが「裏切られた北京」なんです。北京会議では政府はたくさん約束をしたが、十年たつても達成されていない、「裏切られたんだ」という意味のタイトルです。たとえば、先ほど挙げたように、政治の

男女平等が目標を達していない。経済的格差が広がり、最貧層に女性が多い状況は変わりない。女性運動への揺れ戻しもすごい。つまりは政府が、約束を実行できるだけの予算やファンドを出し渋っている、政策が小出しで逐次投入方式なので、大きな枠組みが変わっていない、そのためにさまざまな問題が起きています、と。

日本でもそうですよね。女性の社会進出は結構なことだと言いつつ、役員に女性を起用したりする会社も出てきたが、一方、下の方では女性の正社員を減らして不安定で低賃金のパートを増やす。少子化だから子どもをつくることは大事だと言いつつ、女性を育児休業法の対象にならない非正社員にしてしまうわけです。から、矛盾は見えなくなっただけで解決はしていない。働いている女性が安心して子育てできるような保育システムへの予算を出し渋って、非正規雇用の保育士を増やすとか、大きな状況は変えないまま、部分的に少し手直しして「対策はとっています」と言う。だから、人々は「対策をとつても何も変わらない」と思いこみ、政治的な解決に絶望してしまう。本当は対策をとつていない、資金の流れを変えようとしなから解決しないのに、「何かやっても無駄だ」と無気力にさせられてしまう。ほんとにやる気だったら、予算の配分を大

きく変えて、働く女性に保育を保障する、女性が不安定な雇用につく度合いを減らす、代わりに税金と社会保険料をしっかりと払って担い手になってほしい、という変更を行うしかないんですが、女性を無償労働力として利用したいというムシのいいスケベ心を捨てられないために、それができないんです。

WEDOの報告書では、以上のような分析の後で、三つの障害をあげています。

ひとつが戦争です。アメリカは対テロ戦争と称して軍拡を進め、福祉を削っている。他の国でも、それに関連した紛争がたくさん起きています。アフガニスタンもイラクもこれですよ。「対テロ戦争をやるう」という号令で、世界中が資金をそちらにシフトさせている。

二つめが新自由主義（ネオリベリズム）、市場経済主義です。市場に任せて自由競争させれば物事はうまくいく、平等のための政策などしなくても優れたものは淘汰されて生き残るといふ論理ですから、人間の最低限の生存のための安全ネットは減らされるわけです。勝ったものが残ればいい、というこの論理では、子どもを育てるといふ性別役割分業を引き受けている女性は非常にきつい。子育てに勝ち負けはないわけなのに、その論理を振りかざされて教育費や保育費を削

られると、女性の個人的な負担が激増する。これが経済的ネックです。

三つめが文化面の障害で、原理主義（ファンダメンタリズム）、新保守（ネオコンサバティブ）主義です。神様は女に家に帰れといっているのだから外に出てくるな、という言い方で女性の発言を封じていく。イスラムもキリスト教も仏教も神道もあります。どの宗教にも家父長制の好きな人がいて、教典などからこうした文句を勝手に引つ張り出してきて、女に自由を与えるな、と叫ぶ。こうした男性たちのおこぼれにあずかりたくて、同調する女性も出てくる。「バックラッシュ」ですよ。この三つが三大障害、というわけです。

●女性への資金の流れをどう取り戻すか

竹信 「北京+10」では、女性NGOたちの分析で、そういう構図がかなりはつきりしてきた。以前、Weでも二〇〇〇年五月にシンポジウムをやりましたが（二〇〇〇年七月号掲載）、ネオリベリズムとファンダメンタリズム・ネオコンは一見相反すると思われがちですが、実は連携し合っている。ネオリベリズムは「市場に任せる」というフィクションで物事を進め

るわけですから、実は矛盾が出てくる。そのとき、人々を黙らせるためにファンダメンタリズムは重要な役割を果たします。ネオリベで女性への負担が増えれば、女性は苦情を言い始める。ファンダメンタリズムとネオコンで「家族は大事だ、家族に尽くせ」と言いたてれば、女性は黙る。こういうチームワークです。これらが軍拡路線と手を結んで、軍事にお金を使うために、福祉や教育といった分野を削って女性の無償労働で補わせ、出てくる不満はファンダメンタリズムで押さえ込む。「北京+10」を取材して、この構図が一段とはつきり見えてきた。そうすると、女性の部門には資金が回ってこなくなる。女はカネ詰まりになるわけです。それをどう解決するかがこれからの主要課題だ、と思います。バックラッシュを押し返すだけではなく、その先に、どう女性への資金の流れを取り戻すか、です。

ただ、これまでのように「世界女性会議」を開いて人々の耳目を集める手法には、もう限界が出てきた。アメリカにネオコンの政権が出てきたことで、女性会議を開くと今回のようにかき回される。また、いくら決議をしても、先立つものを調達して実現にまで持たなければどうしようもない。次の手を考えなければ

ばならないわけです。

NGOの提案は、たとえば九月に貧困の解決を目指す国連のミレニアムサミットがある。貧困の解決には男女平等の推進が不可欠だ、ということは、すでに国際政治の中ではだれも反対ができない状況にまでもってきた。これをテコに、女性の部門への資金の増加を迫る。国連改革も話題ですが、ここでも安保理に日本が入る、とかいう議題だけでなく、女性関連の委員会の地位を上げるとか、予算を増やすということを要求していく。女性会議だけでなく、あらゆる国際会議で女性の問題を主流の議題にしていく運動をしよう、という呼びかけです。

ただ、「北京+10」の後に、米国は世界銀行総裁にウォルフオビッツというネオコンの代表格といわれる人を送り込む人事を発表した。世界銀行は九〇年代、貧困の解決や男女平等に力を入れると言い始めていただけに、これは衝撃です。軍拡主義、父権主義、ネオリベラリズムといった冷戦後の弱肉強食主義と、平和主義、女性や貧困層の底上げ路線といった平等主義が激突している。それに対して日本の女性運動がどう参加していくかが、いま問われているわけです。

●国際情報へのアクセスを可能にするために

竹信

そのために大切なのは国際情報をもっと取らなければならないということでしょう。今度の女性会議も、間際までどう対応すべきか女性たちは迷っていた。北京会議は、ジャーナリストの松井やよりさんとか国際問題評論家の北沢洋子さんとか、国際派の女性活動家が中核にいて、海外の運動団体からの情報や方針がもっとスムーズに入ってきていた。今回も女性たちはJAWW（日本女性監視機構）というNGO組織をつくってがんばっていたと思いますが、海外の運動とどう連動するか、NGOとしてどう動くのかという方向が、うまく伝わり切れていなかった面がある。新聞社に勤める身で言うのはなんです、マスメディアだけに頼っていても、マスメディアもバックラッシュの波の中にありますから、簡単に動けない部分もある。情報発信の方法をともに考え直すことと、国際的な家父長主義路線の連携がきているのだから、女性の側も海外NGOとのパイプをもっと強めて、即座に動けるような組織づくりを意識して固め直さなければ、対応しきれないという気がしました。今回の「北京+

10」では、日本の二〇代から三〇代のNGOの女性が、海外NGOと情報交換をし、議場でも英語で発言するなど、個人的には以前よりずっと力のある人たちも出てきた。こういう人たちをサポートして押し出す仕組みが必要ですね。

稲邑 女と男の生き方を変えていこうという路線でやっている場合ではないと？

竹信 それはそれで大切だとは思いますが、そこが変わらないと実は何も変わらないというのは事実だと思います。ただ、「生き方」を変えるには、大きな枠組みを変えないと。いくら「男性も育児参加を」といっても、男性が世帯賃金をもらい、女性が補助仕事しかない仕組みが変わらなければ、男性は家庭に帰れないでしょう。また、女性も経済力をつけようといっても、軍事や会社のために公的資金を使われて、育児や介護のサポートに税金が回ってこなければ、女性は働かざるを得ないんですよ。学校でのジェンダーフリー教育たたきも、「資金を女子どもに回したくないための原理主義による女性の口封じ」の一環と考えられるわかってやすい。こうした大きな変化が見えていないと、ジェンダーフリーの言葉が適切か、そうでないのか、といった小さな論争に終わってしまう。でも、こうし

た大変化についての情報がうまく伝わっていないんですよ。

稲邑 みんな追いつめられ分断されていてつながっていない。

竹信 ジェンダーフリー教育たたきや日の丸・君が代の押しつけに悩んだ教育関係者と、バックラッシュに危機感を持つフェミニストの一部は、ちよつとつながってきたかな。集会を一緒にやったりしていますよね。大阪では、パート労組や女性の労働裁判の支援組織と、女性学などの大学の研究者がつながって「いこ☆る」という新しい形の組織ができました。これは先ほどの「職場の家父長制の中で尊厳をすり減らされていく女性たちにフェミニズムが何ができるのか」という問いに答えようとする試みだと思います。こうした動きをあちこちにつくっていくと、トンチンカンな言辞ばかりが流布していき。たとえば、「女性問題に関心があります」という若い女性が「フェミニストは子どもをつくりたがりませんよね。それは男性と同じになりたがっているからなんですよね」なんて聞いてきたことがあって、仰天した。

稲邑 フェミニストは女性性を否定しているんじゃないかと？

竹信 「フェミニニストは男性と同等に働きたいため

に育児休業を否定している」というのもあった。これは年輩の男性で、まあ、マスメディアが適切に情報を流していないから、その問題もあるのではないかと思うけど、実は八五年均等法のとときにこうした意見だったのは財界だったわけですよ。「男性と同等になりたければ均等法を欲しいなんて言うな」という言い方で均等法をつくってしまった。女性運動は、男性も子育てできるように、「男女共通の労働時間規制を」が要求だったのに、財界の意見が女性運動家の意見であるかのように錯覚されている。フェミニニズムは、女性性の肯定であり、それをもっと拡大するという論理だったと思うのですが。

稲邑 バックラツシユ派が使っている論理もそれと同じですよ。

竹信 夫婦別姓でなければ正しいフェミではない、というのもありましたね。あるフェミニニストが、「子どもがいて、夫婦同姓で、法律婚で。それでも私はフェミです」とうたった本を書いたことがありますが、そんなことが惹起文句になるほど「フェミ」には「べからず」の厳しい戒律があると思われている（笑）。もしほんとうにそうであるならば、制度を変えるため

の女性運動なんていらんですよ。自分で勝手に夫婦別姓にして、事実婚にして、子どもをつくらなければ、それで解決ですから。人々がなぜ法律婚したり同姓にしたりするかと言えば、その方が有利なように誘導する仕組みがあるわけで、有利な仕組みの恩恵を蒙りたい「弱い人」はそちらに行くわけです。事実婚でも相続以外は影響はないそうですが、その場合でも、夫がお金持ちだったら法律婚、となりますよね。だからこそ仕組みを変える必要があるんで、フェミの「戒律」を自力でクリアすればいいなら、法律なんて変えなくていいじゃないですか。自分さえしつかりしていれば民法改正なんていらん、という話になってしまいますよね。

●マイノリティでつながる

竹信 そう考えていくと、何かしていくには、まず仕組みを考える、さらに、そこに問題があるとわかったら、これを変えるためには、生物としての女性だけでなく、その仕組みによって被害をこうむっている男性やマイノリティとも組んで多数派形成をする必要があるわけです。

稲邑 フェミの原則を確認しつつ対象を広げて行く。

竹信 しかも、いまは、社会構造の激変期ですから、男性の中でも利害関係が揺らいでいる人が出てきている。変えることにニーズがある人たちがいるんですよ。たとえば、パートナーに稼いでもらわないとつらい、とか、結婚しない、またはできない男性が増えて、老後の介護だって、公的な福祉を充実してくれないと本当は困る。嫁介護ではやっていけないのは若い世代の男性も同じです。それを疎外する必要はない。

稲邑 そうすると、先ほどの国際情報をとるシステムの確立と二本立てで行くということですか？

竹信 国際的な動きと連動しながら政治の枠組みそのものを押し返していく視点と、狭義のフェミでない層とも共通の課題で一致できるかどうかを探って共闘していく視点の二つですかね。

網野義彦さんの歴史の本を読み返してみても、「定住水田稲作、男世帯主が生産者」という架空の前提で日本の歴史が語られてきた、というくだりに、改めて衝撃を受けました。「夫婦同姓、男は仕事、女は家庭、子どもは二人、法律婚」みたいに、日本の権力者は勝手に標準モデルをつくって、内面から人々を規制する

んですよ。二〇代のNGO女性が、自分は帰国子女でマイノリティだと思っているとところが、とても日本の女性の主流にはなじめないと思ってフェミには関心が持てなかったと言っていた。でも、日本に住んでいる人って、その標準モデルから見たら、かなりの人がマイノリティなんです。その女性に「マジョリテイにあたる人なんて日本には本当はほとんどいないんだから、大きな顔をしていればいいんだよ」と言ったら、驚いていた。

みんなちよつとずつ不幸で元気が出ないのは、変な標準モデルがあるために、自分だけがマイノリティで疎外されていると思っている人が多すぎるから。そこに合うひとなんてほとんどいないのに。政府が税金などのモデルにしている「夫だけが働いて妻は専業主婦で子ども二人」なんていう世帯は、いまやホントに一部ですよ。このモデルは大手企業や中央官庁の中高年以上の支配層の人たちのライフスタイルなんです。この層をモデルにすることで、自分たちを優遇できるし、加えて、この層に認められたもつとも有利な条件が、国民全員のものであるかのような錯覚も与えられる。さらに、このモデルで冷遇される人たちを「標準モデルに合わない自分たちが悪い」とあきらめさせる

こともできる。夫婦別姓にどうして保守派があんなに反発したのかというと、別姓を認めると「標準」の無意味さにみんなが気づいてしまうから。「標準モデルに合わない人」というジャンルで互いをくくってつながってしまえば、これはもうマジョリテイなんですよ。保守派はそうしたつながりを恐れていたともいえるでしょう。

稲邑 ありがとう。「We」はその標準モデルに合わない像をつなげていく路線で行きます。

竹信 標準モデルに合う人は実はいない、みなマイノリティだということです。そのことを理解しあい、共有し、いままでのように、夫婦別姓だとか、事実婚だとかといった自分と同じ条件の人を探すのではなく、「標準モデル」に悩んでいる人を探してそこで一致する。海外との連携も、こうした発想ならやりやすいですよ。海外の人は「標準モデルには合わない人」なんです。

稲邑 海外でいえば、韓国の女性運動はすごいですよ。ひとつの課題が出てくると、普段はそれぞれ違うことに取り組んでいる人たちをそこでワーツと動員して、解決のための人員を確保する。

竹信 それですよ。

稲邑 韓国の報告集を読んで、日本の女性運動もこれを見習えばいいのだと思った。なんで韓国ではこれができるんだろう、と。どこが違うんだろう？

竹信 日本は韓国とか、他国を植民地にして成り上がった方の国で、自分が植民地にされて悩んだことがない国だから、人を蹴落とさないと生き残れないという考え方に慣れすぎているのかも。そうしなきゃ安心できないメンタリテイがありますよ。

稲邑 確かに分断させられているんだけど、自分から分断をつくっているような気もするんですよ。

竹信 「あなたがしていることは、自分より劣ったものを置くことによって安心するという安心の仕方なんですよ」と言つて、意識化させることも大切かも。

稲邑 私のほうが大変なんだ、と抑圧されている順序を競う感じはある。

竹信 社会運動の中で、何かで攻撃されたときに、こちらはずっと抑圧されているんだ、と脅すとむしろは黙ってしまう。だから、自分の身を守ろうとしてやるんですよ。私もやったことあるけど。

稲邑 抑圧や分断のシステムをわかりやすく説明できればいいわけ。

竹信 運動のためのマニュアルをつくって、抑圧や

分断の心理について説明をしてあげて、そういうことはしてはいけませんと解説する項目をつくってでもいいでしょう。

稲邑 むしろ中高年以上が問題なんでしょうね。私もその問題の世代なのだけど、その世代がどかない、地位を譲らないという問題もあるし。

竹信 どいてほしい、といったらだめでしょう。日本人はいつも自分は疎外されていると思ってるから、「どいて」といわれると不安になって逆にしがみつくんですよ。年配の人には、「いまは社会の激変期で若い人は前代未聞の事態の前に放り出されて大変なんだ、だからあなたのサポートが必要なんだ」と言うかわりと納得する。どかなくていいから助けてあげてくれと言うと、自分で「どき方」を考えたりするところはありますよね。ここに期待したいです。とにかく、「[論]」の世界の中だけとか、個人生活の枠組みの中だけとか、国内だけとか、風に当たらない温室的な場所、昔と同じ歌を唄っている、というやり方になっていないかどうか見直してみる、その上で、いま、本当は何が必要なのか、というところから作戦を立て直す、ということが「フェミニズムの有効活用」への第一歩だと思えます。

フ・エ・ミ・ッ・ク・ス・の・ほ・ん

『議会からジェンダーフリー』 木村民子著

A5判並製・80頁・フェミックス刊 500円(税込)

『やさしい英語でフェミニズム』 Colors of English編 吉原令子監修

～英語で女性問題を語るためのワンポイント・レッスン～
A5判並製・128頁・フェミックス刊 1,260円(本体1,200円+税)

『居場所考一家族のゆくえ』 水田宗子著

映画や小説を題材に、女性の、そして男性のさまざまな居場所を探る珠玉のエッセイ集。
A5判並製・256頁・フェミックス刊 定価1800円(本体1715円+税)

『Working With Women～性暴力被害者支援のためのガイドブック～』

フェミニストセラピー研究会編 A5判並製・176頁・フェミックス刊 1260円(本体1,200円+税)

『セックスするなら眠りたい』

20～30代の子育て中の女性たちが、性について本音で語り合った回覧ノート。
ピピピクラブ編 四六判並製・160頁・フェミックス刊 定価950円(本体905円+税)

『わがままな女は幸せになれる』

～Let's 自己表現・自己主張トレーニング～河村ふみ著
言いたいことをさわやかに表現し、人と気持のよい関係を築くためのコツやスキルが楽しく学べる本。
四六判並製・176頁・フェミックス刊1,050円(本体1000円+税)

Femix・フェミックス

tel & fax 03・3424・3603 E-mail : info@femix.co.jp http://www.femix.co.jp

不平等を産み出す

ジェンダー構造の働きを

鋭敏に察知して

迅速に反応する教育

バーバラ・ヒューストン論文の

「本当」の内容 (第一回)

沼崎一郎

(東北大学教員)

●はじめに

山口智美さんの論文が掲載されて以来、ジェンダー・フリーという言葉とその用法をめぐる議論が、あちらこちらで沸き起こっている。論点がいくつもあって、議論は錯綜している(山口さんに言わせれば大混乱している)ようだが、ひとつの大きな論点は、バーバラ・ヒュース

トンの論文「公教育はジェンダーを含まないものであるべきか？」の内容が正確に紹介されたのか、それとも誤って紹介されたのかという問題だろう。

そんなことはどうでもいいという人もいるかもしれないが、学者のはしくれとしては、こうした問題には興味をそえられる。さつそくヒューストンの論文が収録されているリンダ・ストーン編『教育フェミニズム読本』(Linda Stone ed., The Education Feminism Reader, Routledge, 1994) を買い入れ、読んでみた。その結果分かったことは、日本では、ヒューストン論文に「言及」した文献はたくさんあるが、きちんと「紹介」したものは皆無だということだ。私が見つけた一番長い「紹介」は、堀内かおるさんによるものだが、それでもわずか一頁である(堀内かおる『教科と教師のジェンダー文化』ドメス出版、四七頁)。原典と照らし合わせてみると、とても十分な紹介とは言えない。

そこで、ヒューストン論文の内容を、詳しく紹介したいと思う。中身を知らずにああだこうだと議論しても始まらないからだ。特に、英語の言葉の意味と、アメリカ社会の背景とに注意しながら、ヒューストンの文章を読み解いていきたい。誤訳は、「ジェンダー・フリー」の「フリー」だけではないようだ。バイアスという言葉、

センシティブという言葉、そしてジェンダーという言葉そのものの意味も、正確に伝えられてはいないと思えないのである。

●公教育は「ジェンダーを含まない」もので

あるべきか？

ヒューстон論文は、そもそも『教育理論 (Educational Theory)』という教育哲学の雑誌の一九八五年秋号に、ジェンダーと教育に関する特集論文のひとつとして発表されたもので、特集のものになっているのは、教育における性差別とどう取り組むかをテーマとしたシンポジウムであった。そこで問題となったことの一つが、ジェンダー・フリー (gender-free) 教育の是非であった。

ジェンダー・フリーという英語は、ジェンダーという単語に、¹“free”という接尾辞を付けただけの合成語であって、何か特別の用語ではない。まして、特殊な概念でもない。²“free”という接尾辞の役割は、「〜がない」とか「〜を含まない」とかいう意味を加えることだ。シユガー・フリーと言えば、砂糖を含まないという意味になるように、ジェンダー・フリーと言えば、ジェンダー「がない」とか、ジェンダー「を含まない」という意味にな

る。

私は一九八〇年代にアメリカで大学院生をしていたので良く分かるのだが、当時は私の周りでも、「ジェンダー・フリー」の表現に言い換える作業が、あちこちで行われていた。たとえば、学科長のことを英語ではチェアマンと呼ぶが、女性だつて学科長になることがあるのだから、チェア「マン」はおかしい、「マン」を消してチェアと呼ぶべきだといったことが主張されたり、学校の政策として採用され始めたりしていた。

こうした言い換えは、性差別的な言語 (sexist language) を変えていこうという女性運動のひとつだったのだが、言葉狩りだという反発もあったし、「うるさいフェミニスト」に文句を言われなかったために言葉だけ変えればいいという反応もあった。また、フェミニストの側には、チェアマンをチェアと言い換えても、学科長になるのは男ばかりという現状が変わらなければ、何の意味もないではないかといった批判があった。さらに、現状が変わらないのに、言葉の上で「ジェンダー・フリー」にすることは、かえって性差別を見えなくしてしまうから逆効果だという声も強かった。

性差別と闘い、性差別をなくすために、「ジェンダー・フリー」な言葉に変えていくことが有効かどうか、

熱く議論されていたのである。アメリカでは、「うるさいフェミニスト」の力が強かったから、学校や官庁などは政策的に言葉遣いを改め始めていた。私たち学生も、言葉遣いを改めることを教えられた。ここで、フェミニストたちは、「性差別的な言葉遣いを止めなさい」という言い方をしていたが、フェミニストと思われるくない（中立的）な人たちは「ジェンダー・フリーな言葉遣いをしなさい」という言い方をすることがあった。

ジェンダー・フリーな言葉遣いを広めるのと同じように、ジェンダー・フリー教育を行う試みが、アメリカでは一九七〇年代から色々と行なわれていた。目的は、男子か女子かによって、与えるものに差をつけない、与え方に差をつけないということだ。そうした背景があったので、ジェンダー・フリー教育の是非が、教育哲学の分野でも取り上げられるようになったのである。教育をジェンダー・フリーなものに変えていくことで、本当に生徒に与えるものに差はなくなるのか、与え方に差はなくなるのか、シンポジウムの焦点の一つとなった。これに答えようとしたのが、ヒューストンの論文なのだ。

ヒューストンの論文（ストーン編の『読本』一二二～一三四頁に収録）は、序論、ジェンダー・バイアス、ジェンダー・フリー教育の査定、ジェンダーに関する想定、

ジェンダー・センシティブな視座、結論という六つの節から成る。順番に、その内容を見ていこう（以下、本文中の引用箇所の出所は、『読本』の頁番号で示す）。

1. 序論

序論の書き出しを直訳すると「公教育はジェンダー・フリーであるべきかを議論するには、ジェンダー・フリーという言葉の持ちうる意味の違いを選び分けることから始めなければならない」（一二二頁）となる。

ここで、なぜ書き出しがこうなっているのかを知っておく必要がある。そもそも、彼女の論文は、教育における性差別への取り組み方を問うシンポジウムの発表だ。ヒューストンが問題にしたのは、性差別をなくすという目的を果たすためには、ジェンダー・フリー教育が有効だ、という立場である。ジェンダー・フリー教育をすれば、教育にはびこる性差別を克服できるかどうか、これが彼女の関心事だったのだ。

それでは、ジェンダーフリー教育とは、具体的にはどういう教育なのだろうか。そこで、ヒューストンは、「ジェンダー・フリー」という意味を、三つに区別する。

第一の「強い意味」では、ジェンダー・フリーとは、「教育の場に現れるジェンダー差を跡形もなく取り除く

ことよって、ジェンダーを考慮する必要をなくす教育であろう」(二二二頁)。その例として、ヒューストンは、IQテストからスコアに男女差が付くような項目を削除することを挙げている。彼女が挙げるもう一つの例は、男女の体格の差が勝負の結果を露骨に左右しそうなレスリングである。性差が出そうな活動は全て公教育から排除すること、これが第一の意味である。差がつくようなことは全て止めてしまえば、差がつかなくなるのだから、差を気にしなくても良くなるというわけである。

第二の「弱い意味」では、ジェンダー・フリーとは、「ジェンダーを度外視すること、ジェンダーに注意を払わないことを意味する」(二二三頁)。学校の受験資格や、特定の教育プログラムへの参加基準にジェンダーを用いないことが、その例である。後で紹介されるように、体育の授業でも男女別に試合をさせたりせず、男女混合チームで試合をするといった具合である。

そして第三の「最も弱い意味」では、ジェンダー・フリーとは、「ジェンダー・バイアスがいないという意味だと思われる。この理解では、ジェンダー・フリー教育とは、ジェンダー・バイアスを除去した教育という意味になる」(二二三頁)。

しかし、これに続けてヒューストンはこう書いてい

る。

この最後の最も弱い意味では、誰もがジェンダー・フリーな教育に賛成していると言えてしまう。生まれつきの性差についての間違った考えや教育の場におけるジェンダー役割の不適切な正当化に固執する保守主義者たちでさえ、教育におけるジェンダーによる区別は差別にならない、と言い張ることができてしまう。だから、「公教育はジェンダーフリーであるべきか」という問いは「公教育からジェンダー・バイアスをなくすべきか」と言っているわけではない。バイアスをなくすべきか否かは、争点ではない。なぜなら、あらゆる立場の人々が、すくなくとも言葉上は、公教育にジェンダー・バイアスがあることはならないということを既に認めているからである。(二二三～二二三頁)

つまり、第三の意味は考えなくても良いとヒューストンは述べているのである。なぜなら、ジェンダー・バイアスを除去した教育といっても、曖昧すぎて具体的な内容が分からないからである。それに、第三の「ジェンダー・バイアスを含まない」という意味でのジェンダーフリー教育は、いわば総論であって、これに反対する者はいない。だが、第一の「強い意味」と第二の「弱い意味」

でのジェンダー・フリー教育は、具体的な教育内容をどうするかについての各論であって、こちらについて賛否が分かれている。だから、第一と第二の意味でのジェンダー・フリー教育の具体例について、詳しく検討を加えようというのが、ヒューストンの意図だ。

この第三の意味の理解あるいは誤解が、日本での議論の混乱の元となっているようなので、くどいようだが、三つの意味の違いについて、詳しく説明しておきたい。

分かりやすい例として、就職試験における性差別の問題を考えてみよう。面接試験の結果、ある受験生は「積極的で、やる気を感じられる」と評価され、もう一人の受験生は「攻撃的で、協調性に欠ける」と評価されたでしょう。ところが、この二人に聞いてみると、どちらも「しっかりと相手の顔を見て、はっきりと自分の意見を述べた」そうである。はて、どうして評価が正反対だったのだろうか？ 答えは簡単、一方は男性で、他方は女性だったのだ。同じような態度を示しても、受験生のジェンダーが見え見えだと、それに試験官が影響されて、評価が客観的でなくなる。これは困ったと考えた会社は、「ジェンダー・フリー」な試験をしようと思いついた。

この会社が、ヒューストンの言う「強い意味」での「ジェンダー・フリー」な試験をしようとするなら、面

接試験を廃止するだろう。面接をすれば、試験官のジェンダー・バイアスが働いてしまうからである。受験番号だけ記した筆記試験だけで合否を決めることにする。それも、平均点も標準偏差も男女差が出ないことが証明されている問題しか使わない。

この会社が、ヒューストンの言う「弱い意味」での「ジェンダー・フリー」な試験をしようとするなら、ジェンダーを見えなくする工夫をするだろう。たとえば、面接試験の際には、男性か女性か分からないように、受験生をついたで隠し、見えないようにする。声で性別がわかっていけなないので、ボイスチェンジャーを使って、声の質を変ええる。そうすれば、試験官のジェンダー・バイアスが働きにくい環境を作ることができる。

この会社が、ヒューストンの言う「最も弱い意味」での「ジェンダー・フリー」な試験をしようとするなら、おそらく、どうしていいか分からないだろう。「ジェンダー・フリー」な試験をするには、「ジェンダー・バイアスを含まない」試験をすればよいとしか言われないうししたら、具体的にどうすればいいかはサッパリ分からない。せいぜい、試験官を集めて「ジェンダー・バイアスをなくして、平等な面接をしましょう」という研修をするくらいだろうか。

上のたとえで、もうひとつ重要なポイントがある。

「強い意味」で「ジェンダー・フリー」な試験も、「弱い意味」で「ジェンダー・フリー」な試験も、両方とも、コチコチの性差別主義者が試験官になっても、その影響が評価に出ないような工夫をしているということである。これなら、性差別の悪影響を減らせる見込みがある。ところが、「最も弱い意味」すなわち第三の意味では、コチコチの性差別主義者に、性差別はやめましょうと掛け声をかけるだけに終わっている。それでは、性差別を止めてもらえる保証は何もない。「バイアスをなくそう」というお題目を唱えるだけでは、バイアスはなくせない。これで、ヒューストンの言う三つの意味の違いがお分かりいただけただろうか。そして、なぜ第三の意味には中身がないかも、納得いただけただろうか。それでは、ヒューストン論文の中身の紹介に移ろう。

2・ジェンダー・バイアス

—— 不平等なアクセス、参加機会の不平等と、

ジェンダー付けられた評価——

副題を見ただけでも、ヒューストンがジェンダー・バイアスと言うとき、彼女の念頭にあるのは、偏見や差別意識ではなく、不公平な教育制度と教育実践だということこ

とが分かるだろう。

ここで、バイアス (Bias) という英語について補足しておく。英語のバイアスには、公平な判断を妨げるような嗜好や偏向という意味だけでなく、そのような偏見に基づく不公平な行動や政策という意味もある。だから、ジェンダー・バイアスがないということは、単にジェンダーに関する偏見がないというだけではなくて、個人的にも制度的にも、そうした偏見に基づく差別が行なわれていないということをも含んでいる。そして、どちらかというと、行動や制度に見られる不公平のほうが、英語の用法では重視される。バイアスをなくそうと英語で言うときは、意識を変えようというよりも、行動や制度を「より公平」に変えようという意味が強い。

ところが、日本語では、「バイアスがかかった見方」といった用法に見られるように、偏見とか偏向という意味しかない。不公平な行動や政策という意味が、すっぱりと抜け落ちており、それゆえ行動や制度を変えなければバイアスはなくせないという視点が欠落している。なまじカタカナ語化しているために、英語を読むときにも、ついつい日本語的な解釈でバイアスの意味を捉えがちであるが、それでは文意を正しく理解することはできないのだ。注意が必要である。

アクセス (access) という英語も日本語に訳しにくいのだが、(外にいる人が) 中に入る道 (方法)、(中に入る人が) 外に出る道 (方法)、(簡単には利用できないものを) 利用する道 (方法)、またはそうした道 (方法) を持つ権利という意味がある。教育におけるアクセスとは、入学の道、卒業の道、様々な施設や資源を利用する道 (方法) のことであり、不平等なアクセスとは、ジェンダーによって、それらの道 (方法) があつたりなかつたりすることである。

ヒューストンが不平等なアクセスの实例として最初に取り上げるのは、体育だ。体育の授業が男女別に行なわれているために、男子と女子の教育が異なり、不平等が生まれているという研究例を引きながら、それでは、ジェンダー・フリーな体育は解決になるのかと、ヒューストンは問う。体育を男女共修にすれば、女子のアクセスと参加機会は増えるだろうか？

そうではないという実例を、ヒューストンは引用している (一二三〜一二四頁)。この研究によると、五年生のバスケットボールの授業で、男女混合チームを作って試合をさせると、男子が男同士でパスを回すために、女子はゲームに参加できないという結果が示されている。しかも、それは技術レベルには無関係だという。男子は、

上手な女子にパスするよりも、下手な男子にパスすることを選ぶのだそう。ついつい男子にパスしてしまうという行動が、ジェンダー・バイアスなのだ。

とすると、体育をジェンダーフリーの授業にしたことで、女子はかえってボールに触れなくなつた (ボールへのアクセスを失つた) のであり、授業への参加機会も奪われてしまつた。ジェンダーを度外視して男女混合で体育の授業をしたら、かえってジェンダーの不平等を強める結果となつたわけである。ジェンダーを度外視するだけでは、ジェンダー・バイアスはなくせないという一例だ。

同じようなことが、教師と生徒の関係や、生徒同士の関係でも見られるという (一二四〜一二五頁)。アメリカの研究では、共学クラスの場合、教師は、自身の性別にかかわらず、女子よりも男子に注意を向ける傾向があり、この傾向は、高校や大学では一層強くなるということが明らかになつていそう。たとえば、手を挙げて、女子は男子よりも指名される率が低いとか、同じような発言をしても、女子は男子よりも褒められることが少ないという調査結果があるそう。生徒同士の関係でも、共学クラスでは、女子は発言を控えたり、おとなしくしていることが多く、稀に発言しても、すぐに男子に

さえざられたりするという調査結果も出ているという。日常会話におけるジェンダーの力関係や、会話スタイルのジェンダー差が、教室の中にも持ち込まれ、女子のアクセスと参加機会を奪っているというわけである。共学にすることで、教室へのアクセスは対等になっても、それだけでは、教師へのアクセスや会話へのアクセスは対等にはならないのである。教育実践の中にジェンダー・バイアスが残ってしまうということだ。

もうひとつの問題は、評価がジェンダー付けられているということだ（一二五頁）。たとえば、はっきりと言いたい切るとか、敢えて挑戦的な意見を述べるのが「知的で権威がある」と評価されてしまうと、普段からそのような発言スタイルを持つ男子のほうが、ほかし表現を多用したり、遠慮がちに話したりする女子よりも、高く評価されることになってしまう。女子は、自分たちの慣れ親しんだ発言スタイルを劣ったものと扱われ、低い評価しか受けられなくなる。これが、ジェンダー付けられた評価ということである。評価のシステムそのものが、男子を優位にするようにできているわけだ。とするならば、システムが変わらない限り、女子は低く評価され続けることになる。それが、ジェンダー・バイアスなのだ。

私なりにヒューストンの主張を解説すると、次のよう

になる。女子が自信を持って発言できないとしたら、それは「女らしさ」に縛れているからではない。自分の発言は低くしか評価されないことを、日頃の経験から無意識のうちに感じているからである。評価のシステムが偏っているから、彼女は自信を奪われているのである。変えなければならぬのは、女子の意識ではなく、評価のシステムのほうである。

（次回につづく）



ジェンダーフリーは素敵な日本語・ ある男性の視点から

足立広明 (大学教員)

長い間何の応答もしないままですみません。毎日自分の身の回りのことすら追いつかない状態で。しかし、誌面はいつも興味深く拝読しておりました。毎回読みきりの記事もそうですし、連載ものでは松本一郎さんの話などがとても参考になりました。

さて、ジェンダーフリーを巡る論争はもう「ひと回りしたので打ち止めになりたい」とのことです。編集長の稲邑さんも疲労困憊状態であるようなので致し方のないことですが、三号目ぐらい読んでやっと「そうか」とわかってきた読者にとっては、とくに三号目ぐらいの意見に賛成の読者にとっては、感想や意見を寄せようと思っても、「もう載せない」と言われたら「ええっ」という気になります。どうせやったのだから、急に終わらないでほしいと思う人も多いのではないのでしょうか。編集部は疲労を増すのでなく、プラスになる形で拾ってやっても

よいと思われるものはこれからも適時掲載継続でよいのではないかと思いますが、いかがなものでしょうか。第一、まだ議論されていない部分があまりにも多すぎると思います。

「ジェンダーフリー」と「男女平等」は同じでない

We十一月号の上野さんへのインタビューの中で、たとえば、「ジェンダーフリーがだめなら男女平等でいいじゃない」という上野千鶴子さんの意見についてですが、この『We』誌でも連載されていた蔦森樹さんの「ジェンダーフリー」などはどうなるのでしょうか。国連決議で「男女平等」という概念は男女特性論を超えたと言われても、「男でも女でもない」という人はその「男女平等」に含まれるのでしょうか。それから、私のような異性愛の男性からもまだ発言がままのような気がします。「ジェンダー」も「ジェンダーフリー」も女性学の中で出てきた概念であるにせよ、女性だけの話し合いで決められてしまったのでは、それこそ「男女平等」でも「ジェンダーフリー」でもない。ちょっと男にも一言ぐらい言わせてから終えろよ、という気がします。それについて以下私見を述べてみます。

(1) 「性同一性障害」の人々の視点は？

まず、葛森さんのような「性同一性障害」と言われる人たちについてです。ご本人からの反応を聞けば一番なのでしょうが、あの方の連載と今回の騒動を見ていた男性読者の反応というのもあっていいでしょう。私は葛森さんのような人を「性同一性障害」と呼ぶことに抵抗があります。この人の『男でもなく女でもなく』という本のほうが「性同一性障害」という言葉が流行るより前に出ていたからということもありますが、それ以上に「障害」というからにはやはり身体的性と文化的性とは一致しているほうが「健常」ということになってしまいうからです。「性」や「愛」のからむ問題で一方を「正統」とする視点を含んだ言葉には私は抵抗があります。「現在のジェンダー観の拘束からは自由になった人」というように、いつも説明で言いますが、一語にまとめると言われれば、今の日本語では「ジェンダーフリー」な人々というぐらいいいかないのでしょうか。

上野さんは「後退でない」と強弁しますが、どうしても後退した、古めかしい印象はぬぐえません。勉強不足なものでその国連決議を読んだことがないのですが、「男女平等」と言うからには、基本的に男性支配、男性優位に対して戦ってきた女性の主張を容れるということ

であって、両方の性の間をさまよう人々のことは、たとえ書かれていた、視野に入れていたにせよ、まだまだこれからの検討課題、派生的な次の課題といった扱いだっただけではなかったのでしょうか。間違っていたならごめんなさい。しかし、どうしてもそうした語感を免れませんし、そうした両性の間をさまよう人々にとっては「男女平等」では不十分で、ジェンダーという概念ではじめて問題を理解できた部分が多いはずです。そして、当該社会の固定的なジェンダー役割の期待からフリーになるという意味で、語源はどうあれ日本語としてこうした概念を「ジェンダーフリー」と呼ぶというのなら何が悪いのでしょうか。

葛森さんだつてご自分でもインドのことについて翻訳を出されていますから、*genderfree*という英単語には出くわさなかったことぐらいいは経験で知っておられるはず。それにお役所主導のフェミニズムもお好きでないようです。しかし、人生の葛藤の中でまず「ジェンダー」という概念に出会い、その拘束から「自由」になりたいということ、自分の感覚に合っていたから「ジェンダーフリー」と使われたまでのことでしょう。こうした言葉を「本家」の学者の定義に即して論難するのは、イギリス白人がバプア・ニューギニア人のトク・ピジン語を

「直そう」とする活動のようで好きになれません。

私は地中海世界の古代末期という時代を専攻している、キリスト教が支配的な宗教となる四世紀から六世紀の転換期の時代における女性の聖人の活動についていろいろ文献を読み漁っては適当な口頭発表や論文をでっちあげているに過ぎない者ですが、そう言われてみれば私も英語で genderfree という語で書いてある文献は見たことがありません。自分の授業でも「ジェンダー」という言葉は多用していますが、「ジェンダーフリー」という言葉は、言われてみると使ったことがありません。しかし、Freedom from Gender Identification というのは実際にあるフェミニスト歴史家が書いたある章の表題にも出ています。

*面倒くさいのでこれ以外の学者の文章などをさらに直接引用するのは避けませんが、「gender role」を無化する、「この世で女性の仕事とされる役割からの解放」、「その個人を所与の社会における定まったジェンダー・システムから切り離す活動」などといった表現はよくみかけます。

その社会なり文化なりが「正統」として押し付けてくる gender identification からの freedom だということ。「ジェンダーフリー」という概念を使用するというのなら

ら別段何も問題はないと思えます。いちいち「正しい」英語で二、三行にわたるような文章を言えないし、「personal computer」はパソコンなのと同じです。

(2) 男性側の視点

それから、男性側がこの「ジェンダー」という視点と出会ってどう感じたかもなおざりにしてほしくない気がします。私が異性愛男性の代表というわけではないにせよ、ひとつの事例であることは確かです。私が小学生のときでもすでに戦後教育も深まった60年代のころですから、「男女平等」ということはよく言われていました。それは最近のバックラッシュで保守系雑誌に掲載されているような、「男は外で働き、女は家事・育児。しかし、それぞれ立派な仕事をしているからお互い尊重しよう」というような、「特性化」を認めた上での平等ではすたになかった気がします。

たとえ建前の上だけであるにせよ、まず小学校では特性化していない「平等」教育が教えられたと思います。小学生のころには男子である私も「裁縫」を教えてもらった記憶がありますし、主要五教科はもちろん体育などでも男女いっしょで、女子だろうと賢い者は賢いし、強い者は強い。とくに賢い人は将来学者にでもなるのだら

うかと思つたし、強い人は揶揄的ながら「相撲取りにでもなればいい」と思つた。「主婦」などというものはの人たちがなつて夫の仕事を支えていくかどうかなどは考えもしなかつた。少なくともまだ「大人」となるのは遠い未来の時点で、給食当番と掃除は将来主婦となる女子の仕事だということのようなことを想定している者もなく、男子であろうと同じようにやり、サボるヤツは怒られる。それで当然と思つていました。

もちろん、小六ぐらいになるとなぜか女子だけ集められて先生から秘密の授業を受けたり、中学では女子だけ家庭科で男子が技術であるとか、高校になると男子は「格技」で女子は「家庭科」とさらに分離は激しくなつていました。第一服装からして男子は学生服、女子はセーラー服のわけですから、わが国ではせつかく小学校で「男女平等」の雰囲気を感じ取つても、中学高校で一氣に特性化していくことになるのでしょうか。しかし、中学や高校でもなお女子であろうと男子であろうと自分の判断で職業に就き、進学もできるという原則は崩しておらず、実際にそうして道を開いていった女性はたくさんいたわけです。少なくとも学力のある女子が東大や京大を受験したいといつてそれを表面上拒むことはできないシステムではありました。あとはそれがどれだけ

社会人として受け入れられるかが問題であつたのでしょうか。

私自身、そうして狭いながらも進学、就職した女性と結婚し、中学や高校の教育はどうあれ、ご飯をつくつたり掃除をしたり、育児の分担も「平等」でかまわないと思つて今日までできました。その「平等」も摩擦やでこばこばかりで、明治や大正のころからもっと立派に、自然にやつていた方はいくらでもいたに違いありません。

しかし、「ジェンダー」という概念は、こうした「男女平等」よりもさらにもう一段深い、自らのアイデンティティにかかわる部分の問題を照射しているように思われてなりません。すでに十年も前のことになってしまいましたが、娘を迎えに保育所に行くとき、三人の男の園児がふざけあつていて、そのうちひとりも転んでへなへなと尻餅をつくとき、残りの連中がいつせいに「わあ、××、お前女みたいや！」と叫びました。それを聞いたその××、やおら立ち上がつて「ちやうわい、俺女ちやうわい！」。私もきつちりこの子と同じアイデンティティを持ち続けています。男は立ち上がらなければ、敵に立ち向かわなければ、敵を打倒して自らの「偉大さ」を示さなければ。同じ本誌の沼崎さんに叱られるのは必定でしょうが、なおこうした感情は三つ子の魂百までと

いいのか、捨て切れません。「女ちゃうわい！」が悪いのであって、女の人も障害者も老人も、だれでも人間「ここは引かんぞ」というときがあるだろうが、と思っ
てしまいます。

ただ、こうした「立たねば」という気持ちだが、自分をこれまでどれだけ幸福にできたのか、とか、多くの男性をどれだけ追い込んでいるのかという問題は見えるようになってきました。運動が大の苦手で小学校の遊びの野球でも中高の球技大会でも悲惨な思い出しかないのだけれど、なおかつそれを「楽しい」「正しい」と思っ
て、自分自身の味方になろうとしてこなかったこと。それはやはり「男女平等」というだけではだめで、「ジェンダー」（と言っ
て悪ければ文化的性差、後天的な性的価値観）というものを知って
はじめて見えてきたことです。

これまでの論争を見ておきますと、上野さんに賛成するにせよ反対するにせよ、ほとんどが女性の学者や運動家はかりであったように思えます。男性が混じっていたとしても、そうした女性の運動に共感する立場からであったと思われ
ます。もちろん、男性を中心とした保守系言論人の攻撃に対して、女性の人権を守る女性の運動の担い手が危機感をもって発言するのは当然のことで、私も後述する
ように上野さんに手を挙げて批判した中学教

師や新聞記者さんに意見を同じくする者であります。ただ先述のような大きな問題点が抜け落ちているように思えるのです。私はこれまでも「ジェンダーフリー」など使ったことがないし、これからもたぶん使わないと思
います。が、「こういう素敵な言葉がある」という紹介ぐ
らいは積極的にしてみたいと思いました。

※

※

さて、この論争でうれしかったのは、「東大」という「聖域」で、左右を高位聖職者に取り巻かれて護衛され
た「神様、仏様、上野様」を前にしても、中学の先生がひるまずに手を挙げて負けずに食い下がっていたこと。私はこのように食い下がる人がいたこと、また稲
邑さんもその様子を正直に活写し、反論も掲載しているところ
にフェミニズムはまだ「オウム真理教」になっ
ていなかったんだと安堵しました。二／三号で私が一番共感
できた人、それはいろんな学者ではなく、三浦純子さん
という会社員の方の素直で好感の持てる文章でした。私も「フェミニスト」と呼ばれる人々がたとえ明日急にな
くなったとしても、自分は自分でこれまで培ってきた
視点でモノを見ていこうと思いました。

* Joyce E. Salisbury, *Church Fathers, Independent Virgins*, London/NY, 1991, p.97.

□授業実践
家庭科 風がかわる 匂いがかわる

「ミッフィーのおばあちゃん」から「死」を考えよう



浅井 由利子

あさい・ゆりこ ●同志社女子大学講師

私は高校の家庭科教員として約二〇年間勤めた後、現在は大学の生活科学部で家庭科教科教育法と総合演習を担当している。

私が最初に「死」について考える授業を実践したのは一九九〇年だった。そのころ若林一美さんの『あー、風——愛する人の死を看取るとき』（PHP研究所）を読んだことがきっかけで、生徒が死をどのようにとらえているかを知るためにアンケート調査をし、その後、どのような授業にするのかさんざん悩んだあげく、がんの告知について、六人グループで考え、それぞれ患者本人、家族、医者、看護婦などの役割を決め、ロールプレイをする授業をおこなった。授業は決して成功したとは言えなかった。重いテーマにもかかわらず、短い時間でロールプレイをしたので死に対する考えが深まって

いなかったのだろうか。おもしろおかしくストーリー展開を考え、発言するグループもあり、あとで、ちょうどがん闘病中の父親を持つ生徒から批判されたことを覚えている。ロールプレイの後は、『死にゆく人々のケア』（医学書院）から、死を目前にした患者の「告知」に対する考えやホスピスについて紹介することでも何となく授業を終えた。授業を行ったころに身近な人を亡くした生徒に對しても十分な配慮ができず、つらい授業になってしまった。反省した。

その当時、まだ、「死の教育」に對する人々の関心は高くなく、同じ学校の国語の教員に、参考になる本はないかと相談したとき、「僕は、死の問題は学校教育の中でする必要はないと思う」と言われた。私は、初めてのテーマに取り組んで、消化不良の状態で終わってしまったの

で、次にやるときには、もっと違う形でやろうと思ひ、その後も死に関する本を読んだり、絵本が好きだったので、『100万回生きたねこ』（佐野洋子、講談社）、『わすれられないおくりもの』（スーザン・バーレイ、評論社）を読んだりしていた。

その後の授業では、さらっと死をテーマに取り上げたことがある。たまたま、本の間から、B5裏表に小さい字でびっしり、祖父が死んだときの様子、自分の気持ちを書いた生徒のプリントを見つけた。五年ぐらい前のものだろうか。「じいちゃんが死んでその死が受け容れられない。理解できない。今までおみやげのキーホルダーをもらっていたけど、もう会って渡されることもない。ご飯も食べることができない。葬式の日に母か

ら『じいちゃんからだ、冷たいでしょ』といわれ、手に触ると確かに冷たかった。死んだら冷たくなるのかもしれないけど、そういうふうには思えず、氷があるから冷たいだけと思うようになった。もう、ずっと動かないということも、わかることができなかった。でも、心のどこかで動くかもしれないという気持ちがあったように思う。お墓に行っても、お墓の中にいるということがまだ事実と思えない。今は信じられない。会いたいのに。この状態のまま、どうしたら理解することができなのか。人の死を今はどうすることもできないし、どうしていいのかわからないけど、いつかは私も人の死について向き合っていないかといけなのかもしれない」というようなものだった。

数年前、高校の家庭科教員の小林由佳さんから、テレビ番組で、ディック・ブルーナさんが『ミッフィーのおばあちゃん』（講談社）を使って授業をしていたというのを聞いた。この絵本は、「うさ子ちゃんシリーズ」の中で唯一、死をあつかったものらしい。

ブルーナーさんは生徒たちに絵本を読んで聞かせ、最後の場面、数場面をわざと読まないでそこでやめ、「さあ、これからどうなるか自分たちで絵本の続きをつくってごらん」と言って、思い思いの絵本をつくらせ、それを読んでもらって、最後に「ぼくはこんなふうにつくったよ」と話したそうだ。

これを聞いて面白そうだなあと思った。まず、私自身がつくってみることにした。私は、おばあちゃんついで、小さいときからおば

あちゃんの家のすぐ近くに住んでいた。私が二六歳で結婚する直前にがんで亡くなった。病院での死で、私はそこにはいなかった。いろんなことを思い出しながら、絵本のストーリーを書いてみると、三ページではおさまらず、絵を描いて四場面になった。二〇年以上たった今も、祖母のことを思い出すたびに胸が詰まってくる。

絵本が好きな私は、これなら私にとつて無理がなく、生徒も死について構えないで、知らない間に考えさせられたということになるかもしれないと思った。

ちょうど、高校生の選択授業「発達と保育」も担当していたので、これを高校生と大学生で同じ授業をやってみることにした。

『ミッフィーのおばあちゃん』は一二場面ある。

「これから絵本を読みます」と言うと、高校生も大学生のときも、さつとこちらを見てくれた。

「ミッフィーは とても かなしいの。なみだが ほつんと できて きました。ミッフィーは、 どう したのかしらね。きのうの よる、ミッフィーのおばあちゃんが しんで しまったのです。ミッフィーは かなしくつて かなしくつて。」

「おばあちゃんは いつものように ねて いるみたいだけど、 きょうは ちがうの、もう いきをして いないの。」

この二場面はコピーしてみんなに配った。

その後、涙を見せるおじいちゃん、ひつぎの中のおばあちゃん、お父さん、お母さん、おばさんがお別れに来る。お別れの時間が来て、森の中のお墓に運び、お父さ

んがお別れのことばを言う。

「おばあちゃんを うめて、そのうえを きれいな こけで おおいました。それから おばあちゃんが やさしかった ことを かいいたしを たてました。」

ここまで読んで、二、四、だいたい三場面分のストーリーを書いてもらうことにした。

A4の紙を二つ折りにし、この絵本と同じように左側にストーリーを書き、右側に絵を描くことにした。この作業は個人差が大きく、さらさら書いていく学生もいたが、長い間考え込んでいる学生が多かった。

私のほうは、初めて死についての授業をした時と違って、肩の力が抜けて、ずいぶん気楽にできたように思う。真正面から「死について考えよう」と始めたのではな

く、絵本の続きを考えようというところが、大きなポイントかもしれない。

絵本ができたならグループでお互い自分のつくったものを読む。高校生は「恥ずかしいから、先生読んで」と言う声が強かったので、私が読んだ。

ストーリーは各自いろいろだったが、あえていくつかの種類に分けてみると、

① おばあちゃんは、死んでもミッフィーの心の中にいる。

② おばあちゃんは、天国からミッフィーを見守ってくれている。

③ おばあちゃんは、お星様になってみている

④ おばあちゃんとの思い出がいっぱいあることに気づいた。

少数意見としては、

⑤ 死は悲しくない、自然なこと。

必ずやってくるもの。

⑥ どうしたらさみしさを乗り越えられるのだろう。

⑦ おばあちゃんが死んだと思ったが、それは夢だった。

というものもあった。

高校生は、絵本のストーリーをもしかししたら、知っていたのか、お墓を花で飾るというものが多かった。

・空に上っていくおばあちゃんをみんな笑顔でおばあちゃんの好きな花を振って見送った。

・おばあちゃんにさよならするのはすごく悲しいの。みんないつか死んでしまうということを知ったミッフィーは「生きることに死ぬことは自然なことなんだね」とおとうさんとはなしをした。

・おじいちゃんに、おばあちゃん天国から見てくれているから

と教えられ、もうさみしくない。

・ミッフィーのおかあさんは「おばあちゃんはいあわせなのよ。」ミッフィーはその意味を考えました。

・思い出の楽しい涙とちよっぴりさみしい涙か混じってでてきました。ミッフィーはちよつと大人になったような気がしました。

学生がつくった絵本を読んで気づいたことは、いつまでもおばあちゃんの死を悲しんで泣いてはいけないうちでいるということである。だから、すぐ元気になるって笑顔を見せるミッフィーが印象に残った。

それは絵本の最後がハッピーエンドになるものだと思うのだろうか。絵本の設定がおばあちゃんの死であり、老いてやすらかな死を迎えたというような感じに

思えるせいかもしれない。

しかし、実際には、若くて死ぬ場合もあるし、突然の事故、不治の病でつらい闘病後の死、老いて孤独死などいろいろな死がある。

しかし、今までタブーとされてきた死について考える第一歩として、絵本づくりを通して死を考えたいというのはいい試みだと思う。

グループで読みあうことで、さらに、いろんな死に対する感じ方、考え方があることを知って、学生にとってよかったと思う。

最近特に感じるのだが、受身でただ聞いている授業ではなく、参加し、体験し、考える、そんな授業が必要だと考えている。

『死』って、何？——かんがえよう、命のたいせつさ』（ローリー・クラスニー、マーク・ブラウン、文芸社）という絵本がある。生き

ているってどういうこと？ から
はじまって、死ぬってどういうことか、大好きな人が死んだとき、まわりの友だちがしてあげられること、死んだ人をいつまでも忘れないようにするには、など、わかりやすい絵と文章でかかっている。

この授業のあとに、死んだ人を
忘れないようにするためにはどうしたらよいか、考えを出し合ってもよいかもしれない。たとえはこの絵本では、思い出のものを集めたノートをつくる、特別な場所に持ち物を飾っておく、ベットやぬいぐるみにその人の名前を付ける、思い出を絵や詩にかくなどがある。

この授業のあと、私は生命倫理
学の講義を聞く機会に恵まれた。そこで体験したことだが、関西学

院大学の藤井美和先生が死生学の講義の中で、一二のハートマークの中に、形のある大切なもの、形のない大切なもの、大切なアクティビティ（活動）、大切な人、これら四種類を三つずつ書き、それから、どうしても一つ、なくさなければならぬとしたら何を選ぶか決め、それを破っていくワークを紹介されていた。一つ破り、そしてまた次の一枚を破る。これを続けて、最後には何が残るだろうか。形あるものか、形のないものか、活動か、人か……これは死の疑似体験なのだろうか？ ただ紙を破るだけのことでも、心が痛くてなかなか破れなかった。このワークを絵本づくりのあとにしてもいいかもしれないと思った。

「らしさ」からの解放をめざして

ジェンダーの視点のある授業

(2)

「男らしさ」の授業



柏木 修

かしわぎ おさむ ● 公立中学校教員

一、「男らしさ」の授業

二年生になった時、自分のクラスも学年も、一部の男子生徒はとにかく元気で、「男らしさ」にとらわれ、常に他を圧倒していなければならぬような雰囲気がありました。一方で、「男らしさ」に無縁なおとなしい男子生徒もたくさんいました。両者をつなぎ、女子ともつなぐ上で、「男らしさ」へのとらわれから解放する授業をやってみました。

「いじめによる自殺をインターネットで調べました。八六年から九六年まで、合計四十件ありましたが、男女比はどうだったでしょうか」と、まず質問します。

生徒たちの予想は圧倒的に「女子の方が多い」というものでした。しかし、実際には、男子が三十件でした。続いて、いじめに限らない一般

的な自殺者数を予想させます。これも女性が多いと予想する生徒が多いのですが、違っています。ここでは二〇〇三年度の自殺者数を『警察白書』から見てみましょう。

年齢	女	男
～19	248	365
～29	996	2357
～39	1230	3373
～49	1031	4388
～59	1715	6899
60～	4217	7312

見て分かるように、男性は女性の約二倍、年齢によっては三倍以上にもなっています。これは実は世界的にも同じ傾向があるのだということとを伝えます。

その上で、なぜこんなに男性が多いのかを考えさせます。

いじめ自殺については、「男は暴力的だからいじめの度合いがひどいから」「相談相手がいないから」「プ

ライドが高いから」「男は強くなければならぬから人に言えない」などが出されました。一般の自殺については「男は責任を抱え込んでしまうから」「家族を養っていかなければならぬから」「仕事一筋で来ているのに、リストラされるとどうにもならない」などが出されました。

続いて、「いじめ電話相談」に携わっている人によると、「電話相談」をしてこないのはどちらの性か、と問います。すぐに「男」と返ってきます。そのとおりなのですが、なぜかと問います。「プライドがある」「恥ずかしい」「弱みを見せたくない」「いじめられている自分を認めたくない」などが出されます。

ここで話が急に変わって、「結婚している男性が一番嫌がる家事は何か」という質問をします。家事をいろいろあげてもらいながら当てさせられるのですが、実は「洗濯物を干す」ことだといえます。なぜかを考えさ

せます。「人目が恥ずかしい」「奥さんにこき使われているみたい」「女性の下着を干すのがいや」などが出されました。

以上のことを元に、男たちは何にとらわれていると考えられるか、と問うと、「男らしさ」という言葉が出てきます。「男なんだから強くなってはならない。弱みは人に見せられない。プライドが高いために人に相談などできない。そして一人で悩みを抱えつつ、自らの命を絶ってしまう。」そんな「男」の姿が明らかになってきました。

追い討ちをかけるように、最後の男の姿を見えます。六十歳以上でパートナーに先立たれた男女の平均寿命はどちらが長いかを、問います。もちろん答えは女です。男の平均は三年未満、女の平均は何と十五年です。これはなぜか。生徒はもちろん、結婚年齢が男性のほうが上の場合が多いことに気づきますが、この年数

の差はそれだけでは説明できません。「仕事ばかりしてきて、仕事が終わったらやるべきではないから」というようなことが出されますが、もつと端的に明らかにするために、かつて兵庫県が行った「独居高齢者」の意識調査を紹介します。それによると、女性の悩みのトップは、「経済問題」であるのに対して、男性の悩みのトップは「孤独」であったのです。つまり、男性は仕事一途で、地域での付き合いもなく、プライドも高いため、「孤独」を解消できないのです。

「男は怪我をしても我慢し、泣いたり、愛情を大っぴらに表現したり、他人の感情に反応を見せたりするべきではない」「男は常に自信に満ちていて、度胸があり、自制心がなければならぬ」「男には危機に面したとき、これを受けてたつ能力が必要だ」「男性は頼もしく、責任を引き受けなければならぬ」「男は家族を養い、守り、強い父親であるべきだ」「男は

決断力と指導力がなければならぬ」
：こうした「男らしさ」にとらわれ
たために、「男」がどんな人生を生き
ねばならないかが明らかになりました。
た。

そして、その「男らしさ」とは、
生まれつきでも何でもなく、社会や
文化によってつくられたものなのだ
ということを次のように話します。

「男の子」は幼児期に、母親から、
「おまえは男だ（女ではない）」とい
うかたちで、精神的な分離を強く要
求される傾向があります。最も重要
な他者である母親から切り離された
男の子は、そのために自分を取り巻
く外部との関係に距離をとりたがる
ようになります。それが男の子に他
者との「共感の能力」や「親密さの
感情」をおさえさせることになるの
です。一方で、男の子は、母親から
切り離されることで、強い不安感を
持ちます。その不安を押さえるため
に、自分のまわりの人やモノを、な

んとかコントロールし、支配しよう
とします。こうした対応は、母親だ
けからでなく、学校やメディアから
もシャワーのように浴びせられてい
きます。こうして男の子は、強い支
配の欲望をもつクールで冷静な、そ
して他者との感情的な共感能力にお
いて女性に劣る、というイメージの
存在にさせられていくのです。

このような話をしながら、つくら
れた「らしさ」なんだから、そんな
ものに縛られてつらい思いをする必
要なんかないんだ、もつと楽になっ
ていいんだ、というメッセージを送
っているのです。

二、授業の感想から

この授業を受けて感想を書いても
りました。紹介します。

■なんかもっと自由に生きてほしい
です。「男らしさ」についての話を聞
いたとき、ほんとに「ロボットみたい：

」って思った。それより自分らしさ
を作ってほしいです。

■自分にも「男らしさ」っていうも
のがあると思う。男は本当は泣きたい
けど我慢するというのがときたまある
と思う。でも今回の話を聞いて、泣き
たいときは泣けばいいと思った。そし
て、これからは「男らしさ」にとらわ
れずに生きたいと思った。あといろい
ろな家事も将来のことを考えて、でき
るようにしておきたいと思った。

■女の人より、男の人の方が自殺す
る数が多いことにびっくりした。男の
人は弱みを出せないということが分か
り、僕は「男らしく」とか考えすぎな
いようにしようと思った。長く生きる
ためにも家事をしようと思った。

■僕は小さい頃から泣き虫で、男だ
から泣いちゃいけないと思えば思うほ
ど涙がポロポロこぼれてくることを経
験しました。最近はめったなことでは
泣かないけど、泣いてストレスがなく
なるなら、男も女も関係なく大泣きし

ていいと堂々と言えると思いました。

■ いじめで自殺するのは圧倒的に女子が多いと思っていました。集団でシカトしたり、かげでヒソヒソ言うから先生とかにばれないように表面では仲良くしていても、裏ではいじめてる……みたいな。男子は教室とかで殴りあいで、次の日には仲直りしてる……っていうのを見てきたから。男子は単純でいいなあってずっと思ってた、男になりたいと思っていた。けど男の人いろいろな大変なんだなあと思った。こういう「くらしさ」がなくなるといいなと思った。

■ 自殺するのが「男性」に多いっていうのにはビックリした。でも、その自殺する理由を聞くと分かるような気がした。男って大変だなあ。女は強いっ。このこと学習したら……何かフクザツな気持ちになってきた。でも、面白かった。

■ 僕はこの授業を受けて、男らしさというものを考え直しました。小さい

ころから「男なんだから」のようなことをたくさん言われてきました。でも、男らしさというのは、ただの作り物で、時には自分の荷物になるんだと思えました。

■ 男らしさ、女らしさなんて関係ない。自分という人間を大切にしたい。いいじゃない、男がままごとをやっても、いいじゃない、女がけんかが強くなった。全然関係ないって、最後にそう思いました。

■ ふだん気にしていなかったけれど、「男らしさ」というものは意外と社会の中で定着しているということを感じておもしろかった。そのうち、もつといろいろな偏見がなくなる世の中になると思う。そのときには今日のことを思い出してみたい。

■ 男女差別って女の方が多いから、「男女差別をなくそう！」っていう運動はあるけど、男ってそういうのがないから、みんな追いつめられていくのかなあ。「泣いたっていいんだよ」っていい

うのを世界中の人が認めてあげるには、あとどれくらい時間がかかるんだろう。■ 私は男ではないからよくわかんないところがあるけど、男の人って苦しんでいて寂しかったりしていて、大変なのは女の人だけじゃなく、男の人もみんな同じに悩んでいたことが分かった。

この授業が変化をつくりだしたわけではないと思いますが、この後、私のクラスの「やさしい男子グループ」を中心に、放課後になると、クラスを越えていわゆる「男らしく」ないグループが結集し出し、楽しそうに遊ぶ姿が多く見られるようになってきました。そしてクラスの中にも存在感のある、「男らしい」グループと対抗できる勢力として育っていききました。

（授業の参考文献として「男性学入門」伊藤公雄、作品社を使用しました）

□ 授業実践 □

家庭科 風がかわる 匂いがかわる

覚醒と自立のための
「シエンダー論」

● 女子大での教育経験から

第17回……………

母性本能はない

沼崎 一郎

ぬまざき いちろう ● 東北大学教員。

専攻は文化人類学、東アジア研究、男性学。著作に「キャンパス・セクシュアル・ハラースメント対応ガイド」（糖嶋野書院）「なぜ男は暴力を逞むのか」（かもがわブックレット143）かもがわ出版、2002年ほか。

* 質問・ご批判を歓迎します。
numazaki@sat.hokku.ac.jp
まで電子メールでお寄せください。

当初のシラバスの順番とはずれるが、「らしくない」男の話をしたので、それに続けて、子育てする父親の話をすることにした。例によって、ビデオから始める。見せるのは、NHKの不思議大自然シリーズの一作で、パナマ諸島のジョフロア・タマリンというサルの子育ての話である。

このサル、授乳以外の子ども世話は、全て父ザルが行うのだ。母ザルは、授乳が終わると、さっさと子ザルを降ろしてしまう。降ろされた子ザルは、父親の背中に乗る。そして、四六時中、父ザルの背中で暮らす。樹上で遊んでいた子ザルが地面に落ちると、助けに行くのは父ザルである。チーチー泣いていた子ザルは、父ザルの背に乗ると、ホッとしたようにびたりと泣き止む。十五分ほどのビデオは、父ザルの子育ての物語だ。

ビデオを止めて、スクリーンを上げ、大きく黒板に書く。「母性本能は

ない」と。

本能とは、簡単に言うところ「持って生まれた反応の仕方」だ。母性本能とは、メスには「子どもを世話するという行動様式」が「持って生まれた反応の仕方」として備わっているという考え方だろう。しかし、そのような反応の仕方が、メスという性別に必ず備わっているとは限らない。ジョフロア・タマリンは、オスが子どもの世話をするように進化した例であり、母性本能が全ての動物のメスに備わっているわけではないという好例である。

最初に見たサルのビデオは驚いた。てっきり母性本能というのは、動物特有のものであって、それがサルから進化した人間にも受け継がれているのだと思っていたのだが、例外もあるのだなと思った。こういう感想を持ってもらえれば、大成功である。

「動物もの」は見た目もかわいい

し、学生の注目を引きやすい。「父親が本能的に子育てするサルもいる」ということは、母性本能が必ずメスに備わるとは限らないという証拠ではない」と強調するのだが、「人間の男も、サルを見習うべきだ」といった勘違いした感想も聞こえてくる。「動物もの」は、とかく擬人化して描かれるので、まあ仕方がないことではあるのだが。擬人化も、自分についての反省につながるなら、意味がある。

このビデオを見て、母親はほとんど子育てせず、父親に任せっぱなしのような印象を持った。父親が常に子どもとともにいて、歩行訓練などをさせている様子を見ると、ありえることなのに、どうしても違和感を感じてしまう自分がいる。父親は社会に出て仕事をし、母親が家のことをするものだということを、今までの経験から感じているからだと思う。このビデオを発して、私の頭にあった思い込みを

見した。

次に見せるのは、アカと呼ばれる中央アフリカの狩猟採集民の写真である。男性の子育て参加の度合いが世界で一番高いのは、このアカ人かもしれない。特に、生まれたての新生児の頃から、母親と同程度に、父親がママメメしく赤ん坊の面倒を見るのである。

アカの父親の子育てを私が知ったのは、アメリカの人類学の学会の書籍展示場をウロウロしている時だった。偶然、父親に抱かれた子どもの笑顔の写真が目飛び込んできたのである。ちょうど、自分の子どもも小さい頃で、私も子育てにいそしん

Intimate Fathers

The Nature and Context of Aka Pygmy Paternal Infant Care



Barry S. Hewlett

でいたから、なごやかな父親の表情と子どものくつろいだ様子がとても印象的だったのだ。「この父親は、本当に子育てしている。私と同じだ」と直感したのだ。慣れない父親に抱かれた子どもは、ぎこちなく緊張した表情になる。決して、この本の表紙の子どものような顔にはならない。それを、私は体験的に知っていた。

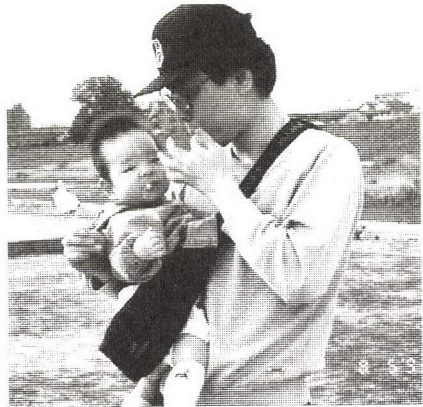
本のタイトルは、直訳すると「親密な父親」であるが、乳幼児に優しく接して世話をする父親たちということである。そして、アカ人の社会では、それがごく普通なのだ。アカ社会とは「父親の子育てが当たり前の社会」なのである。

本の中の写真を紹介しながら、アカ社会について簡単に説明する。男女が共同で、網に獲物を追い込むネット・ハンティングという狩猟を行う社会であること、多くの面で男女平等な社会であること、女性と子どもに対する暴力がほとんど見られず、

父親が子どもをたたいたりしたら、それは立派な離婚の原因になること、子どものしつけも、決して体罰など用いず、子供同士がけんかしそうになつたら、そっと引き離し、それとなく暴力がいけないことを教えること、などなど。そう、「父親の子育てが当たり前の社会」は、「DVも児童虐待もない社会」だったのだ！

「アカのおとうさんたちは、私と同じです」と言つて、次に私の子育ての写真も見せる。子どもに哺乳瓶を与えている写真、おむつを換えている写真、胸の上に抱いて一緒に寝ている写真、ひざに抱いて歯を磨いてやつてる写真などなど。

アカの父親が、抱っこベルトのような網に子どもを入れて抱いている写真があるので、それと並べて私が抱っこベルトで子どもを抱いている写真も見せる。「ほら、同じでしょう？」と。著作権の問題があるので、ここでは私の写真だけ載せよう。も



う一二年も前の写真だ。

そして、こう聞く。「君たち、一応、生物学的には女なんだよね？今、目の前に赤ん坊が裸でいたら、世話できるかい？」首をふる学生がたふさんいる。「母性本能が備わっていたら、できるはずなんじゃないの？」と突つ込みながら、こう続ける。「今、目の前に裸の赤ん坊がいたら、私は完璧に世話できますよ。何をどうすればいいのか、何が必要なのか、全部分かるもの。子育てした

ことがあるから、分らないことは何もないし、私にできないことも、何もないよ。私は、男だけど、自分ひとり、ちゃんと赤ん坊を育てる自信あるもんね。」「男の私にできて、女に生まれた君たちにできないなら、やっぱり母性本能なんてないよね。」

「私はね、おでこに触るだけで、子どもの体温がほしい○・五度単位で分かるよ。触ってみて、毎日触っていれば、平熱がどれくらいか自然と覚えるでしょ。だから、今日はちょっといつもより熱いな。これくらいなら、三七・五度未満だなとか、三八度は越えてるなとか。」

「子どもの好みの料理だって、何でも作れるもんね。朝はフレンチトーストがいいって言われて、君たちの中に作れる人だけだっている？ ちゃんと前の晩から卵と牛乳に漬けてくんだけ。バナエッセンスたっぷりふつてね。」

最後に、「子育てする父親は、私

だけじゃないからね」と言いながら、育児する日本の男たちのビデオを見せる。厚生省が「育児しない男を父とは呼ばない」というキャンペーンを始めた頃に放映されたNHKのBS討論の一部である。子どもの保育所の送り迎えと夕食の世話をしている公務員の男性や、勤めを辞めて専業主夫になった男性が料理をしたりPTAに出ている様子が紹介されているものだ。

「いいですか、子どもを産むことと、自分のオッパイを子どもに飲ませること以外、女でなければできないことは何一つないんですからね。オッパイだって、代わりにミルク飲ませればいいんだから、本当に男にできないことは、妊娠と出産だけだよ。とにかく、出てきた赤ん坊の世話は、男でもできるし、している男はたくさんいるし、それが当たり前の社会だってあるんだよ。」

「母性本能というのは、子どもの

世話を女に押し付けられるために都合のいい神話だね。本当は、そんなものはないの！」

学生たちの感想は、「母性本能はない！というのほちょっと驚いた。でも先生のスライドを見たり、今までの子育てのお話を聞いて、なるほど母性など関係ないのかなと思った」といったものが多い。

女性に母性本能がないという先生の言葉は、けっこうショックだった。母性本能というのは、男性にいたし、女性であることの証とも感じていたからだ。でも、そのように思うことで、自ら女性と男性の壁を作っていたのだろう。

という反省が得られれば、この授業をやった甲斐があるというものだ。

母性本能なんてないって言われて、最初はえっ？ と思ったが、よく考えてみると女の人でも子どもがきらいな人もいる。小さい頃から、

ドラマや昔話などで、母の愛というのを教え込まれてきたが、男に都合のいい考え方なんだなと思った。

しかし、母性本能がないとは納得できないという感想も少なくない。根深い思い込みは、そう簡単には消えないものだ。反対に、母性本能がないと聞いて安心したという学生もいる。子どもがかわいいとは思えないのだが、子どもがかわいいと思えない自分は変なのかと気にしていたというのである。

母性本能の神話を打ち砕くのは容易ではないが、子育てするパナマの父ザル、子育てするアフリカの父親、子育てする日本の父親と並べていくと、少しはこの神話を揺さぶることできるようだ。自分、バナマのタマリンには活躍してもらおうつもりである。

第十二回

案ずるより
産むは難し

およそ楽観的にものを考えがちな私は、「案ずるより産むが易し」を信じてきた。ところが三月までのモデル事業が終わり、県住宅供給公社との新規契約をめぐって、私の意思通りには事は運ばなかった。一時は、四月一日からしばらく「ひまわり」を閉めなければならないところまで追い詰められた。「それだけは絶対避けたい」の必死の訴えで何とか逃れられたが、問題はただ先送りになっただけで、根本的なことは、未だに何ら解決していない。詳細については、ここでは明らかにできないが、私のストレス性腸炎はしばらく治癒しそうにない。昨年十一月末に四年ぶりに内科医を訪ねて「ウイルス性腸炎」と診断された。「からだが疲れた時にウイルスにやられるのですよ」とのこと。以来五カ月投薬を続けているという始末。最近では、ストレス性腸炎と自己診断している。しかし、この問題はいつまでも延ばすことはできない。

解決のための決断は目の前に迫っている。

こんな時、体長九〇センチもの塩引きが届いた。送り主は酒田市に住む大場・金子夫妻である。明石公園は桜が満開、「どうしてこんな時期に鮭なの。粕汁の季節でもないのに」と不審に思いながら包みを開けてびっくり。黒々とカチンカチンに乾いた鮭、まるで讃岐のカンカン石のよう。お目にかかるのも初めての鮭である。どうしていいかわからず、早速、酒田に電話をいれた。金子氏いわく、「それは塩引きといって薄く切ってあぶって食べれば、最高に美味ですよ。これは六カ月も風乾したもので、その出来栄えは作り手によって違うのです。名人といわれる人がいたりして、今回いいものが手に入ったのでお送りしたのです。四、五年は持ちますよ」。全く驚いた。ゲスの私は早速明日の「ひまわり」のメニューのなかに入れたいと考えていたのだから。ひとまず私の研究対象として吊り下げておこう。わが家の玄関のセミ吹き抜けの真ん中に吊るした鮭は、通る度に牙をむいて私に襲いかかりそうな格好である。ひとときでも私の関心を他のことに向けてくれて大場・金子さんありがとう。これを切るのは肉屋さんの電気スライサーか、電気鋸か、まずそこから始めなければならぬ。ちなみに農文協『聞き書き山形の食事』をひもといてみた。庄内平野・最上で鮭が出ており、「いお」「よう」と読ませていた。し

かし、カンカン石は発見できなかった。四、五年は大丈夫ゆっくり調べてみよう。塩引きに続いてなんと因島（広島）から「安政柑」に「八朔」が届いた。近くの川で採れた「せり」をどっさり、Sさんが届けてくださった。Sさんは、リタイヤしたシニア男性七人で自ら「七人の侍」と称して「ふれあい食事の会」と「子育て支援」をやっている。またまた、露のとうを自宅の庭から採ってきてくださったTさんが今度は成長した「露」を届けてくださった。人が物を呼び、物が人を呼ぶ有様で久しぶりに豊かな気分にしてくれた。明日は久々に洋風メニューであったが、折角の届け物を加えない手はないと「せり」と「露の葉」を添えてミスマッチもいいところの次のような献立ができあがった。「露の葉」の佃煮はたったいま我が家でできあがったばかり。茹でて、しっかりと水にさらしてあくをとり、細かく刻んでごま油で炒め、酒・味醂・醤油・砂糖・だし・ちりめんを加えて炒り煮したもの、ほろ苦さがなんとも食欲をそそる。

主菜・ミニコロツケ・温野菜のサラダ（人参、グリーンアスパラ、コーン）、副菜・カリフラワーとペーコンのミニグラタン、副副菜・せりのゴマ味噌和、せりご飯、味噌汁、箸休め・露の葉の佃煮、デザート・バナナのソーテオレンジソース

久々に差し入れを加えて盛りだくさんのメニュー、一

品一品はほんの少しずつ、どんなテーブルセッティングになるか、楽しみでもある。

配食のチーフOさんがやめる日、彼にとつては最後のおべんとうの確認をしながらのつぶやきが私の耳に入った。「ここはほんといいたいところだよなあ」。こんな心中の彼を、やめる選択しかないとどこまで追い詰めたことが悔やまれた。配食の対象は一人ひとりニーズが異なっている。それぞれの家族関係、経済状態、身体状況、性格を把握することが要求される。単なる弁当配達ではない見守りもある程度必要になってくる。一人暮らし、高齢夫婦暮らしの場合、それぞれに関わっているケアマネ、ホームヘルパーとの連絡を密にすることも必要だろう。

チーフがやめてからの毎日は、ほころびを繕うようになんとか穴埋めをして一日が過ぎていく。「下痢とおう吐でお弁当食べていないんです」「軟食にしましょうか？ おかゆがいいですか？」。朝の電話の応答である。

スタッフは誰言うもなく、「入江さん、おみずでしよう。やっぱりホステスやらなくては」（お弁当を届ける方のご都合やら体調を、毎朝まめに電話をして把握することが大切という意味らしい）。ンン、私にできるかしら？ 崖っ淵に立つ思いである。

（文・いりえ・かざえ／イラスト・かとうゆみこ）

●「ひまわり」TEL：078-783-7784 アクセス：JR朝霧駅下車、バスで3つ目「明舞センター前」下車

黒岩秩子

ドスンと 落ちて……と 男女平等

くろいわ・ちひこ ●新潟県南魚沼市在住
著書に『首つあげ家族』（役書房）、『ア人の母 国会を行く』（築地書館）など多数。
〒949-7302 新潟県南魚沼市浦佐5428
TEL:025-777-2187 FAX:777-3422
E-mail:c-kuruiwa@mqc.biglobe.ne.jp
<http://www.5f.biglobe.ne.jp/~chizuko/>

小学校四年から東京暮らしだった私は、夫の仕事に付き合って、一九七一年にここ魚沼の地へ越してきた。当時は、上越線で七時間かかったというのに、越してきた翌年、浦佐に新幹線が停車するところが決まり、今では、東京は通勤圏内ということになってしまっている。とはいえ、当時と比べても、人口に変化もなく、平均的な農村の生活だと思っている。

しかし、浦佐へ引っ越してきた私のあり方は、軟着陸とは正反対。ドスンと落ちてきた、というのが、この地の人たちから見たらぴったりの表現だったと気づくのに、何十年を要したことが！

子どもたちが小学校に入学するや、学校の規則を変えるようにと次々に要求した。家に帰ってから規則をなくすこと、名簿の順番

を男女と上下にしないこと、運動会での走る順序も男女と前後にしないこと、家庭科を男性教諭も受け持つこと、性教育を男女一緒にすること……。子どもが七人いてくれたお陰で、小学校は二〇年、中学校は一五年、親として付き合うことができた。その結果、要求はほとんど容れられることになった。

当然のことながら、家の中でも、夫とはやり合ったり説得したりしながら、家事全般を手ほどきした。今では夫はすべての家事をこなせるようになり、私は、夫をひとり置いて東京でひとり暮らしをすることに何の躊躇もいらなかった。

そんな夫に対して、地域の皆さんは大いに同情し、そうさせている私に非難が集中していた。だが、私はそんなことに懲りるどころか、「男の手料理の会」を提案し、「男

は一品手料理を、女は手ぶらで食べるだけ」というのを仲間内で何回か開催した。主に我が家が会場だったのだが、男たちの手料理はなかなかないので、私の子どもたちは、その日を心待ちにしていた。そのうち何人かは、料理の腕を上げ、調理師の免許を取ってしまった人も出てきた。

夫も、料理担当だった夫の母が亡くなると、「毎日朝飯をつくる」と宣言した。延べで五人の高校生の弁当づくりを、「お弁当」というどでかい本を買ってきて、一〇年間励んだ。弁当を媒介として会話がスムーズに行くようになると、それまで言にくいことは私を通して父親に伝えていた子どもたちも、直接父親と話せるようになってきた。夫も、子どもとの距離が近くなったことを、ことのほか喜んでいた。

とはいえ、こんなことは、この地域では圧倒的少数派である。

二〇〇二年三月の新潟県議会議会では、新潟県男女平等条例が審議されていた。ここ南魚沼郡（二〇〇四年一月に合併して南魚沼市となった）選出の自民党県議齋藤隆景氏は、反対討論をした。曰く「日本は昔から女性を敬ってきた国。福島瑞穂が言うように、スウエーデンのような社会になったら、家庭はなくなる。家庭に専業主婦がいなくなったら大変」。

この日、新潟市の女性団体は、傍聴に行つてこのひどい質問に抗議する構えだったのに対して、齋藤隆景のお膝元の女性たちは、バス二台で傍聴に行き、隆景の質問に拍手喝采だったという。

都市と農村のこれだけの隔たり！ しかし、そのことはすでに

実感していた。

一九九九年、大和町で男女共同参画に向けたグループを半官半民でつくり、不定期の会合をもつていた。行政の担当者が、あるとき、あまりに出席が少ないのを何とかしようと、町内の女性団体すべてに対して、三人ずつ出すようにとお願ひした。そのときはばかりは五〇人ぐらいが集まって大盛況。ところが、発言が始まると「やっぱし男は強くなっちゃだめ」「男に頼って生きていく」などが飛び出してくる。これが、多くの女性の本音なのだ。以来、人数を増やすことを考えることをやめた。

バックラッシュといわれるが、バックレしようもない状況である。私は周りはお構いなしに「ドスンと落ちてきた」から、やりたいことができたのかもしれない。

わがまま映評 22

『きみに読む物語』

満田康子

恋に堕ちるといふ言葉がびつたりの出会い。製材所に働く若者ノアは、避暑に来ていた一七歳の少女アリーにビビツときた。彼の強烈な追っかけが始まる。ハイソな少女が、身の回りにいる金持ち坊ちゃんとは違う破天荒な若者に引かれるまでに時間はかからなかった。ブレイキが外れたような狂おしい恋が美しい風景を突つ走る。しかし、時代は一九四〇年。まだ階層を越えた恋は御法度の時代。一人娘をブランド女子大に進学させて幸せな結婚をさせようとしているアリーの両親は、肉体労働者であるノアとの仲を引き裂く。それから毎日、ノアはアリーに手紙を書く。しかし返事は来ず、三六五通の手紙を書いた後、ノアは断念する。戦争から無事に帰還したノアはアリーを街で見かけるが、彼女の傍らには婚約者がいた。両親も祝福した富裕で安定した結婚への道が、アリーの前に開かれていた。失意のノアは、かつてアリーと将来を誓った廢屋を、自分の夢に忠実に完璧にリフォームする。出来上がった家の前に立つノアの写真をアリーが目にしたのは、ウエディングドレス試着の日。七年前と同じようにノアのもとに駆け出していくアリー。なんと陳腐なラブストーリー。

一味違うのは、若くてはじけるような二人のその後が描かれていることだ。湖のそばのこぎれいな老人ホームに痴呆となったアリーがいて、そこに老いたるノアが朗読に通つてくる。彼が彼女のために読んでるのは、痴呆を意識し始めたアリーが彼らの青春の日々を書き留めたものなのだ。映画は、朗読を通して二人の現在と過去を行き交うつくりになっている。ノアは、過去の日々を朗読で再現することによって、アリーが異世界から戻ってくるのをひたすら待つ。

不自然に美しくメイクしてドレスアップしているアリーは無表情で、夫も認識できないが、物語の進行を楽しみにしている。アリーは時々、狂気の発作も起こす。でもノアは諦めない。

死の直前に人は一瞬、正氣に戻るといわれる。アリーの部屋に忍び入ったノアを、彼女は夫だと認識する。ベッドで抱き合う二人。「一緒に死ねるかしら？」アリーの問いに「愛は不可能を可能にする」と答えるノア。翌朝、発見されたのはベッドで両手を握り合つて死んでいる二人。メルヘン！。冬ソナ現象が始まつて「世界の中心で愛を叫ぶ」「いま、会いにいきます」と、純愛ものがブームだという。さしあたってこの映画は、純愛ものシニア版といった方がいいだろう。

大甘映画の中で、脇役の女性が光る。ノアの無聊を慰めていた未亡人。アリーに会った彼女は、静かに身を引く。その潔さが二人の身勝手さを浮き彫りにしている。そしてアリーの母親。彼女はアリーに工事現場で働くよれよれの男を見せる。「あの人と私は駆け落ちをしたの。でもいま私はパパと一緒に幸せよ」とつぶやいて（その瞳には涙が）、アリーにノアからの三六五通の開封されていない手紙を渡す。母親の娘への一方的で濃い愛を感じさせ、印象的だった。

認知症の描き方も、表面的でリアリテイがないし、アリーにあつさり捨てられた婚約者の怒りや失望も平面的である。全般に心理描写はないに等しく、画面の美しさが突出する映画だ。

「ひねくれた頑固者、皮肉屋さんには向きません」とキャッチフレーズにあった。涙でハンカチをぬらした私は、まだロマンチストなのかも。

(ニック・カサヴェテス監督・2004年・アメリカ)

中畝常雄・治子



(イラスト、中畝治子)

なかつね つねお／はるこ●横浜市在住。

日本画家。祥太、友雄、千明の三人の子育てと仕事に追われる日々の雑感を「ひげのおばさん子育て日記」(二〇〇〇年四月～〇三年二月三日号)としてWeeに連載。祥太は〇二年四月に一七歳で亡くなる。(悼文集「祥太といた時間」千円。関心のある方はお問合(白セツヤ))。●ホームページ<一><http://www.nakaune.com/index.html> ●メール tsuneharu@nakaune.com

未熟な親

高一も終わりになる頃、友雄がまた「学校がつまらない」と言い出した。前にもそんなことを言い出し、心配したことがある。「今の学校を辞めて転校しようかな?」などと言いだしたので、慌てた。受験一色の学校で、友達と楽しく過ごすという雰囲気があるでないようだ。すごく気が合う仲間はいないようだし、クラブ活動は続けているが、好きでたまらず打ち込んでいるというのではない。「本当に転校したいのなら、相談に行くか?」と聞くと、まだそこまでの気持ちはないようだった。

今回、また、つまらないと言いだしたので、放つてはおけないと思い、「留学とか考えてみたらどうか」と薦めてみる。「ホームページで探してみたら?」というところ、モニターを見ながら、「アメリカがいいかな? カナダにしようかな? どこがいいと思う? 留学したまま永住しようかな」などと言っている。数日してあちこちからパンフレットが届けられた。ところが、なかなかパンフレットを見ようとしなない。私どもに言われてやっと開封すると、今度は「これがいいと思うんだけど、来週に説明会があるんだって。明後日までに申し込まなくちゃあ」などと言いだす。いくらなんでも時間がなすぎず。全部のパンフレットを見たわけでもないし、留学期間、

経費、国による違い、帰国後の復学など、経験談をたくさん調べて自分に相応しいものを探して欲しかった。

「もっというんな資料を調べてからでなくていいの！お前は決め方が簡単すぎる！」「大金がかかるんだからね。無駄にしないでよ！」と怒ってしまふ。これだけではない。なんでも簡単すぎる。「面倒くさいが先にあり、簡単にしたがる」といつまでも怒っていると、友雄も「お父さんたちが行けって言ったんじゃない！」と反発してくる。「お前が学校がつまらないって言ってるからだよ」。ここまでやり合うと、友雄はもう自分の部屋に引っ込んでしまふ。

しかし、友雄の言うことも気になる。そうかもしれない：私たちが先走って、友雄を操ろうとしていたのかもしれない。子どもに良かれと思い、ああしたらこうしたらと敷くレールが、子どものやる気を失わせているのかも知れない：多分それに間違いない、と気がつく。

知り合いの家族を思い出した。子どもの意見を尊重する親で、経済力もある。子どもが水泳選手になりたいと言えば、スポーツクラブに入れる。芸能人になりたいと言えば、劇団に入れる。あれこれ変わってしまう子どもの思い付きに、その夢を叶えてやろうと次々レールを敷いていたらしい。その子が大人になってから振り返ってみると、何でも整えてもらい、「自分が何をしたいかが

分からなくなってしまう」と言う。これだ！友雄を同じようにしてしまう所だった。留学したかったわけではないんだ。

待っていいよう。こうしたいと自分から言い出すまで待っていいよう。転校でも、留学でも、退学でも。どうしてもそうしたいと言いつつまで待っていいよう。学校がつまらないなら、面白い所を探せばいいんだ。面白い人を探せばいいんだ。自分で探し出してもらおう。二人でそう話し合い、友雄にも告げる。

祥太を育てている時には、決してこちらの思う通りにはできなかった。祥太の中から出てきたものに、寄り添うしかなくて、それまで待っていいよう、と分かっていたはずなのに。だめだなあ！いつまでも未熟な親だ。

結局友雄は留学せず、転校もせず、そのまま通っている。「中学時代の笑いのレベルは高かったなあ…」と昔を懐かしんだりしているが、休まず通っている。(常雄)

※ ※ ※

妻のイブン……4月で新学期が始まったばかりなのに、くたびれた浮かない顔つき

の友雄を見てるとイヤになります。親としては、できれば暗いよりは明るく青春して欲しいと思ってしまうわけで…。ねえねえ、子どもなんて放っておいて、私たちは自分たちの豊かな老後へのレールを敷きましようか?!(治子)

三浦純子



ジェンダー おやじ

みづら・じゅんこ●神奈川県横浜市在住。
30歳で出産せねばならぬと信じて、産後専
業主婦となるが、自分が思い描いていた子
育てとのギャップにおののいている時『ジ
ェンダーフリー』と出会い、人生が大きく
Happyに変わる……。現在は会社員。Fnet
主宰。

私のジェンダーフリー仲間の友達
が、時々夕飯に呼んでくれる。普段
いない夫がいる時で、家族三人（息
子含）だと息苦しいから、外の風を
取り入れようということらしい。私
は自分ではあまり料理はしないのだ
が、こーやって人の家で栄養をつけ
ている。その夫と初めて一緒に食事
をしたのは、今から三〜四年くらい
前であろうか、私は彼がいかにジェ
ンダーに囚われた「ジェンダーおや
じ」であるかということ聞いてい
たので、一緒にお酒を飲みながら、
ムカつくこともなく楽しく会話をし
ていた。まあ良くいるおやじだよな
あ…：くらいな思いで。すると彼が
「じゅんちゃんって結構いい人じゃ
ん」と言うので、「何よ、今まで悪
い人だと思ってたわけ？」と聞くと、
「いやねえ、じゅんちゃんと出会っ
た頃からあのおばさん（妻を指さ
し）、ジェンダー、ジェンダーって
言うようになったからさー。てっき

り、じゅんちゃんはジェンダーの権
化なのかと思ってたわけよ」。「ジェ
ンダーの権化って何よ」と言うのと、
「そりゃ、何かとジェンダー、ジェ
ンダーって言う人たちの化身みたい
なもんかな」と言うので、彼の妻で
もなく第三者である私は、優しくジ
ェンダーやジェンダーフリーについ
て説明してあげた。そして、それら
は学校教育でも行われていること
で、へんてこりんな考え方ではない
こと、彼女のようにジェンダー、ジ
ェンダーと言う人は「ジェンダー・
センシティブ」であり、まあ、時代
の先端を行っているってことだと思
うよ、と教えてあげた。すると「じ
ゃー、おれがジェンダーフリーだよ
ー。自由な考えで、囚われていない
もの。あのおばさん（妻を指さし）
はジェンダーの権化だ！」と言いつ
つ出た。妻は「話にならん」と言っ
てビールを取りに行った。すると今
まで黙ってTVを見ていた息子（当時

小二（三年生）が振り向いて「お父さんはジェンダーの方だと思うよ」と言っただけ、またTVに向かった。小さい頃から私達と一緒に行動してきただけのことはある。お父さんの方は「なあゝに言っただよー。お父さんはジェンダーフリーだよー。まあ、じゅんちゃんもう一杯いかが」とビールをついでくれた。

まあ、これが自分の夫だったらむちゃくちゃ頭に来ていることでしょ。うが、人の夫であると、怒る気もなく笑える気分になる。友人である妻も、私がいるのと、理解のある息子がいるお陰で爆発せずに済んでいるようだ。

それ以後、「ジェンダーおやじ」である彼は、私のことを結構いい人だと思っただけで、何かと声をかけてくれるようになった。手料理を作ったと言っただけで呼んでくれたり。

そんなある日、「足の爪を剥いでしまったので病院に連れてって欲しい」と連絡があった。車で家に迎えに行くこと、ケンケンをしてやってきて車に乗った。妻や息子は玄関前で手を振っている。私は「えっ？ 行かないの？」と友達を見ると、顔を横に振った。続いて息子を見ると「僕はいいや」とのこと。うううう。

「ジェンダーおやじ」ここまで見捨てられていたのか、と思いつつ救急病院に連れて行くと、駐車場が入り口より離れたところにある。歩くのは可哀想だと思っただけで、入り口で降ろし、「ここで待っててね」と言っただけなのに、戻ってくるという。うううう。手がかかる。家族が付いてこないはずだ。そして治療が終わるのを長いこと待った。やつと出てきたと思ったら、ありがたうでもなく「薬屋どこ？」と聞いてくる。連れて行くと、「診察代払ったら、お金なくなっちゃったから、じゅんちゃん立て替えて取ってきて」と言うではないか。さすがの私も

「あのねー、連れてきてもらって、お金借りて、それで薬を買って来てってのはないでしょ。感謝の気持ちあんのか？」と聞くと、「あるある」と…。

まあ、それでも、第三者の私は笑って許せる。きっとこれが夫だったら、ムカムカしていることであろう。どうして、家族となると反応が変わってしまうのか…。不思議だ。

で、そこで思ったのだが、やっぱり「地域で子育て」と同じように「地域でおやじ育て」のようなシステムを考えて行く必要があるんじゃないか。夫婦だとイライラするようないことも、ポランティアかだと思えば結構できるかも…。家族に囚われない新しい環境づくり。そこから、ジェンダーフリーな関係も生まれてくるのではないだろうか…。と、「ジェンダーおやじ」とつき合っただけであつた。

リレーエッセイ「地方からの発信」

自分が首都圏に住んでいると、どうしてもその現実が世界の中心になって近視眼的にもなるしエネルギーも枯渇してきます。特にこの閉塞感の強い厳しい時代には。全国各地で地道に女性運動に取り組んでいらつしやるかたたちに、次々とバトンを渡して活動を紹介していただき、元気に活動を続けていられる秘訣、人の輪をひろげるのにどのような工夫を、などと、それぞれのグループのパワーや知恵をいただきながら、Weのネットワークがいつの間にかアメンバー状にひろがっていきますように、その思いを込めて、リレーエッセイ「地方からの発信」を企画しました。(稲邑)

第2回●高知から

ピンチを

チャンスに変える力を！

木村 昭子

さむらゝてゐるこ●高知県県在任。
ジェンダー女子習会

ようやくジェンダーのメインストリーム化が日本でも、と期待を集めた「男女共同参画社会基本法」の成立・施行と同じ年、高知では遅ればせながら女性センターがようやく開館した。全国的に大きく遅れをとった女性センター開設だが、高知の女性たちの「思い」の集大成であった。

高知市に女性センターを！ という女性たちの三万人署名等の運動が実り、一九九二年(平成五年)、県市合同設置という全国でも類を見ない形ではあるが、女性センター建設が決定した。この運動に深く関わってきた我々「女性センターを育てる会」(以下、育てる会)は、「設計・運営について提言をさせて欲しい。基本設計・実施設計決定前に提示して欲しい」旨の要望書を持って県知事・高知市長と会見した。席上、その時まだ新進気鋭だった橋本大二郎知事が言った。「だったら最初から、行政・業者・皆さんの三者で一緒に協

議をしていきましょう」と。公的な施設建設の設計段階から利用者が参加するのは特筆すべきこと、少なくとも、女性センター建設では全国でも初めてのケースであろうと思う。

知事の大英断によって三者協議への指定席を確保された「育てる会」の活動は大きく弾みがついた。とはいえ、行政からの財政的支援はゼロ、活動費のほとんどは会員の持ち出しという状況の中で、横浜女性フォーラム、佐賀県アバンセ、福岡市アミカスなど県外施設の視察をやりくりできたのは、「公費出張」などに縁のない女たちだったからこそだろうか。

県内外の施設視察結果や各種カルチャーグループからの要望聞き取り集約などの提言、行政・業者案の検討、さらには館長人選案、センター愛称審査等等、三者による協議は四年間一三回に及んだ。

利用者参加という手法に慣れない県担当者は、メンバーたちの直言に、

時には困惑と苛立ちを隠さなかつたが、足で集めた生の情報を基にした提案には耳を貸さざるを得なかつた。もちろん、我々の提案・要望がすべて受け入れられたわけではない。しかし、この体験から提案型の要望による行政との協働に自信を得たことは大きな成果だつた。また、利用者参加という形への先鞭をつけたと自負している。

かくして一九九九年一月二九日、ついに「こうち女性総合センターソール」が完成。開館一年後「育てる会」は四年間の活動を「女性センターを育てる会活動記録・ソールへの階段」と題する小冊子にまとめ、解散した。次いで、四年間行動を共にした「育てる会」運営委員の五人がつくつたのが「ジェンダー学習会」である。高知ヘジエンダーの風を、と三井マリ子さんの紹介を得てノルウェーの男女平等副オンブッド、クリステイン・ミールさんを招いての

講演会、続いて全国フェミニスト議員連盟夏合宿の受け入れ、さらにはまた三井さんの援助によるノルウェー民主社会党初代党首としてクオータ制を初めて導入したベリット・オースさんの講演会、と矢継ぎ早に事業を展開した。「ジェンダー」解消の旗手である三井さんが今、ジェンダーのバックラッシュ勢力の攻撃により職を失うことになつたのは、ジェンダー学習会だけではなく、「女らしさ」の呪縛から解き放たれる自由を得たすべての女性たちにとつて大きな衝撃である。これを提訴した三井さんを支援する会「ファイトバックの会@高知」を立ち上げ、ジェンダー学習会の活動のひとつに据えたのはいうまでもない。

最近二年ほどは女性センター（現在は男女共同参画センター）の啓発誌作成の委託を受け、これまでの無償労働からの転換を図っているが、今ジェンダー学習会が取り組むべき

大きな課題は、指定管理者制度の導入への対応である。昨年九月には横浜女性フォーラムの小磯さん、つながれつとNAGUYAの渋谷さんを講師に学習会を開催し報告書を作成、今年一月末のソールまつりではワークショップを開いて同制度の周知をはかっているが、知るほどに問題点が浮上する。指定管理者として民間が参入できるチャンスではある。しかし、三～五年という周期で管理者が変わるといふことは、その多くが女性であるセンター職員に有期雇用という不安定な形を強いることでもある。また、管理者が変わることによる運営の質の低下が懸念されないか。しかし、今やもう避けようのないこの制度をどう生かしていくかは、全国の女性施設に関わる女性たちにとって共通の問題であろう。「ジェンダー」という禁断の木の実を食べてしまった女性たちの責任と力で「危機を好機に」変えるしかない。

より産むがやすし、なんとか人に声をかけてもらい、助けてもらって、娘は立派に一日生きていた。

その数日後、とある田舎町で、三人の小さな子どもたちが裏山で迷い、一晩帰ってこなかったという事件がテレビで報道されていた。

村人が総出で探して翌朝ようやく見つかった時の、お母さんの涙ながらのセリフが、「うんとお灸をすえてやります!」。お灸をすえるという言葉がとても温かい感じがして、そのままニュースを見てみると、今度は三人の子どもたちがインタビュウに答えていた。いわく。九歳の女の子「ごめんなさい」。三人は葉っぱを集めてかぶり、寄り添って一晩過ごしたという。彼女たちなりに一生懸命考えて、工夫して不安に耐えた様子がひしひしと伝わってきた。続いて六歳の女の子「うーんと…寒かった」。

最後に四歳の男の子「楽しかった」。へっ?! (隣のお母さんが慌てて「ごめんなさい」でしょ! (怒))

私はテレビの前でニヤリ。当事者でないから言えるのだけど、裏山：村中で総出で：お灸：で「楽しかった」ときたら、なんだかもう泣けてきつつ、でもとつても愉快な気分になった。こりゃ「となりのトトロ」実写版かと思った。

「ひとりの子どもが育つには、村中の人が必要だ」といつてたのは誰だったか。今より忙しくてほったらかしだったに違いないけれど、親がほったらかしにしても、まち全体としては見えている、そんな感じか。安易に昔がいいとは思わないし、村社会なんてイヤなんだけど、昔のほうが子どもが誇らしげに生きてたような気がするけどちがうかな。

「ミニさくら」には、とにかく自

分なりの工夫をして、子ども自身
が実感し、自信を持つための工夫
が随所にある。とてもすぐれたプ
ログラムだし、自分でもやってみ
たいと思う。ただし、これをプロ
グラムとして提供しなければいけ
ないところに、現代社会の悲しさ
があるともいえないもない。

子どもたちが掲げる「ミニさくら」の「大人の約束」(標題参照)がおもしろい。これは、誇り高き子どもたちからの『教育基本法改正案』ではないか。ここにはリアル⇨本物の実感への切ない希求があるように思う。

別れと出会いの季節。親の手を離し、周りに心配されながらも、自分なりに生きていく、自分が決めてやってみる。そんなシンプルなことがどうしてできなくなってしまうのかと、自分の住む団地の満開の桜を見ながら考えた。

木村 栄

父と娘

気の重いことがあつて、うつむいてトボトボ歩いていると、後ろから父娘らしい二人連れの会話が耳に入った。

「○子はいつも背中を丸めて下を向いて歩くけど、女子で一番背が高いから気にしているのか？」

「うん」

「胸を張つて、堂々と歩いた方がトップモデルみたいでカッコいいよ。

背筋を伸ばして顔をシャンと上げて歩くといふことは、姿勢だけじゃなくて、心や生き方の問題なんだ。

人は、そういう人を見ると、いつも前向きで積極的に生きている人だ、ステキだ、つて思うんだよ。間違つても、うつむいてとぼとぼ歩く女にはなるなよ。これは大事なことだから、ちゃんと覚えておくんだよ」

「はい」

私も心の中でハイと返事して、背中を伸ばし、額を上げた。

顔を見なかったが、距離が近すぎ、二人の声はすぐ別の話題に移り、やがて角を曲がつて遠ざかった。

いい父親だ。こんな風に娘を育てる父親が出てきたと思うと嬉しくなる。

昔、「できる女」は父親に愛されて育つた娘に多いという「定説」があつた。

自己肯定能力が高くて、積極的で前向き。信念を持つてわが道を進み、成果を上げる。誰もが自分を好きになるといふ自信が、人を惹きつける。異性である父に無条件に愛される

ことで女としての誇りが植え付けられ、同時に、かつては男の属性とされた勇氣や強さ、健康な野心、指導力といった資質を獲得する。従順貞淑を旨とした昔の女子教育にはなかつたものだ。

社会進出の先鞭をつけた著名人に、「あの人も？」と頷かされることが多いから、一昔前のリベラルな家庭の、一種の英才教育でもあつたのだからうか。それが今一般のレベルに広がつてきた。

母子家庭はどうなる、つて？

「男は強く女は弱い」伝統が潰えた今、父親不在でも、精神的不在でも、逞しい母親に育てられた女の子が逞しく育つている。異性の存在が必要なら、代替父を利用すればいい。昔は可愛がつてくれる親戚のおじさんがいた。今は、母親の男友だちという手もある。要は、子どもの周囲に、この若い父のようないい男が沢山増えればいいのだ。

せつ、勝手にやって！

高橋りす（東京）

二〇〇四年十一月号のWeの特集がバックラッシュについてだと知ったとき、いやあな気持ちでした。あまり、読む気が起こらず、未だにきちんと読んでいない。次の号が出たので、やれやれと思っていたら、あるうことが、二〇〇五年一月号、二・三月号も、続・続とバックラッシュ特集が続いた。こちらも、拾い読み程度できちんと読んでいない。バックラッシュとは、もちろん、男女平等への動きに対する最近のバックラッシュのことで、男女共同参画とか、ジェンダーフリーとか、フェミニズムといった類の分野に関連した運動に対する右翼からなどの攻撃を指している。フェミ業界は、これを由々しきことと認識し、こういったフェミの運動に対する攻撃や妨害に対して憤慨しているらしい。私も一緒に憤慨すべきなのだろうが、どうもそういう気が起きない。何となく白けた気分である。

なぜそうなのかといえは、過去十数

年間にわたる私のフェミ業界での（どの？）経験が原因となっている。Weにもすでに何回か書いたことだが、私は、セクシュアル・ハラスメントのサバイバーであり、九〇年に初めてフェミニズム系の反性暴力運動に参加した。しかし、運動の中で、発言権があるのは、弁護士や大学教授などの有識者フェミニストや、そういった人たちに取り入れることのできた一部の運動家たちのみであり、実際に被害を受けた当事者は、ただ単に救済の対象として扱われ、当事者しか知り得ない情報を提供したり、当事者だからこそ考えつくことのできた意見を直接表明したりすることができなかった。そんな中で、社会的地位の高い、専門家と呼ばれるフェミニストの発言や、運動のやり方に対して異議を唱えようとするたびに、フェミニストを名乗るいろいろな人たちに攻撃され、黙らせられた。それも、私の発言に対して反論をするというのではない。発言させないのだ。私の発言を阻止するためのさまざまなお実のひとつが、「運動に対する批判を許せば、女の運動を潰す口実を男に

与えることになる」であった。運動の批判をすれば、それが外部に洩れ、「女の敵は女」とか「だから女は運動を組織する能力に欠ける」などといった人たちが、私の批判そのものを使って、運動を潰すための攻撃をしかけてくることになったりするというようなことを、女性の運動のさまざまな場面で行われた。「では、表に出ないように内部で話し合いましょう」と提案しても、「話し合う時間などない」「どこでどう男のマスコミに嗅ぎつけられるかわからない」「あなたは運動を潰したいの？」などと、取りつく島もなかった。つまり、「バックラッシュを防ぐ」という口実のために、私はフェミニズム業界での発言権を長い間奪われていたわけである。だから、「フェミニズムに対するバックラッシュを防ぐ」ということが「発言権を奪われる」ということと私の中で完全につながってしまった。そして、「バックラッシュをどうにかしよう」という真面目な記事に対しても、いやあな感じがするのである。書いていて気がついたが、「運動を潰

すつもりか」といって、私の口を封じたやり方は、家庭内性暴力で加害者である大人が被害者である子どもに対して「家族がバラバラになってもいいのか」と脅すのと非常に似ている。恐らく私も脅された子どものように、「運動が潰されては困る」と思い、外部に批判が洩れないように配慮し、内部に向けての批判を続けた。しかし、それは、いわば密室で抗議をするということであり、こちらのいうことに耳を傾けようとしないうる人たちが相手であれば、最も危険なやり方であった。そういうことに気がついたこともあって、私は、批判はオープンな場で、できるだけ残る形でやることにした。そういう方向に転換してから、もう五年以上経つが、運動に対する私の批判がバックラッシュに利用されたという話は一度も聞かない。

私は、セクシュアル・ハラスメントを題材とした一人芝居を出前上演しているが、先日、私の芝居の公演のチラシをある女性センターに置いてもらったところ、「なぜ、反フェミニズムの人のチラシを女性センターに置くの

か」と、利用者から苦情がきたそうだった。つまり、私の活動自体、フェミニズムに対するバックラッシュと認識されている部分もあるのである。

このような状態では、とても「バックラッシュを打ち負かす」ことについての議論に私が参加することはできない。「もう、勝手にやっつて！」と思えばかりである。

※ ※ ※

春そして今年もアメリカで

キャンプシーズン到来です

一見れい子(千葉)

緑の森とお花畑に囲まれた六万坪の敷地の中でゆっくりと過ぎる時間。どこまでも広がる青い空、澄み切った空気の中で、温かい地元の人々と共に、思いっきり遊んでみませんか？ 経営者から管理人、料理人まで、女性パワ―で今年もはじけます。「気」にうるさい友人によると、「あの土地は、女性の気に満ちている」とか。けっこうワイルドなんだけども。

★十六年目を迎えたコロンビアーナ・キャンプ、ただ今参加者募集中です！

△活動内容▽乗馬、遊泳、ハイキング、ハーブで花輪づくり、カヌー、射撃体験、等等。

△場所▽アメリカ合衆国ワシントン州カナダ国境沿い、ドライゴーチキャンプ場

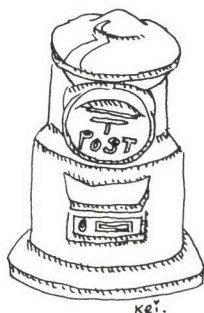
△期間▽7月14日～8月8日(前半・後半のみ参加可)

*詳細はメールまたは電話でお問合せ下さい。

*電話&Fax 043(273)2124

* <http://www.lenc.jp/wildearth>

*メール reikonys@cnc.jp



●バックラッシュとジェンダーフリー論争はきりがないので(疲労困憊したので)もう打ち止めにすると言言したが、ほんとうはこれから始まるのだ、と思っていた。案の定、足立さんと沼崎さんから嬉しい「待った」がかかった。そんなわけで、今回はバックラッシュとフェミの現状をめぐる竹信さんのお話と「誤読」が問題になったバーバラ・ヒューストンの論文を中心に。私のしつこい食い下がりや嫌がらず(?)、入稿直前までつきあってくださった沼崎さんに感謝しつつ、日米の言語の違いも考慮に入れながらここまで噛み砕いて説明してくださる人がいなければ、スタート地点にも立てなかつたことを実感した。(稲邑)

●娘はボーイフレンドの身長なんて気にしてないし、「かっこいい!」と言われて嬉しそうだし、「みんなが自分のことを好きになる!」と言う。これを聞いた時、すごいなあと思った(私はずいっと背が高いのと胸が大きいのがコンプレックスで背中を丸めてたから...)。これって私の育て方がよかつたってこと? 時代

が少しずつ変わってるってこと? しかし気づけば変われるってのもまあいいから:私はフェミと友だちの助けがあったから母子家庭でサバイバルしてこれたし、自尊心もそこでようやく高まって、今は自分が好きだなあ:(笑)。(中村)

●私は、息子たちには家事育児を担うよう教育(?)した。そのかいあって、この四月子どもが誕生した息子は、家事育児を担おうと一生懸命やっている。しかし、彼女は専業主婦志向で、プログラム1の息子はまだ安月給で、連日終電で帰るような働き方。私は息子の健康が心配で、彼女にも働いて欲しいと思うがそれを押し付けるわけにはいかなかったと姑ジレンマに陥っている。やっぱり働き方のシステムを変えないことには意識だけ変えたってダメなんだよなあ、竹信さんの原稿を読みながらつくづく思った。

(河村)

●「温室フェミ」といえば、フェミックスも「温室」かも。一般社会の状況からは隔絶しているこの居心地のよい職場環境は稀有だと思う。そんな職場が存在するだけで意味があると根拠もなく確信しているの、何とかサバイバルしなくて

は。フェミックスが推奨しているイオンパウダソーダにほれ込んだ河村さんが「この洗剤に命をかける」と宣言していますので、ぜひ買ってください。(大沼)

■早々に継続手続をしてください。皆様ありがとうございます。手続がまだの方は、ぜひ!継続して購読してくださいますようお願いいたします。なお例年、お振り込みの遅れる方が多いので、ご連絡がない場合、引き続き五月号までお送りしています。中止の場合はご一報いただけると幸いです。(編集部)

くらしと教育をつなぐWe

2005年5月号 (132号/vol.14 No.12)

2005年5月1日発行

定価……680円 (本体価格648円+税)

(年間購読料7500円/送料共)

発行……femix・フェミックス

〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3-703

tel & fax 03-3424-3603

E-mail: info@femix.co.jp

http://www.femix.co.jp

みずほ銀行 池尻大橋出張所 (普) 1501277

郵便振替 00130-7-754314 (有)フェミックス

編集……稲邑恭子・中村泰子

装幀……川口民子 イラスト……中村 桂

印刷……(有)イー・エム・ピー

●本誌掲載記事の無断転載、複製をお断りします。

<1998年度 各号のテーマ>

月	号	テーマ	在庫
4	61	居場所考	×
5	62	学校・地域・社会	△
6	63	多様なフェミニズム	△
7	64	女と男の働き方を考える	△
8/9	65	私たちはなぜセックスをするのか?	△
10	66	<遊び>が環境を変える	△
11	67	<承認>をめぐって	△
12	68	<試行錯誤>を支える	△
1	69	多様な表現をひらく	△
2/3	70	買春春の是非論を超えて	◎

<1999年度 各号のテーマ>

月	号	テーマ	在庫
4	71	居場所考Ⅱ	○
5	72	学校で生き延びる方法	◎
6	73	(フェミニズムの時代は終わった)のか?	×
7	74	セクシュアル・ハラスメント	△
8/9	75	ジェンダーに敏感な教育を	△
10	76	ジェンダーフリーってなに?	○
11	77	語られなかった言葉を聴く	△
12	78	地域介護のネットワークを	△
1	79	「男らしさの」の再定義	△
2/3	80	フェミニズム2000	○

<2000年度 各号のテーマ>

月	号	テーマ	在庫
4	81	違いとつきあう	△
5	82	「国旗・国歌」考	○
6	83	ジェンダーの視点から「働くこと」を考える	△
7	84	フェミニズムへのバックラッシュ?!	○
8/9	85	自尊感情を高める性教育	×
10	86	差別を考える	×
11	87	ジェンダー・フリー教育の可能性	○
12	88	「自己決定」を支える	○
1	89	「男女共同参画」を活かす知恵	○
2/3	90	境界を生きる	○

<2001年度 各号のテーマ>

月	号	テーマ	在庫
4	91	「いじめ」に立ち向かう	△
5	92	ジェンダーの視点から「働くこと」を考えるⅡ	◎
6	93	「働き方」の発想を変える	△
7	94	暴力から身を守る	×
8/9	95	ストーカー被害に遭わないために	◎
10	96	スローワークで生活を楽しむ	○
11	97	ころばぬ先の医療消費者教育	○
12	98	子どもの「参画」と環境教育	△
1	99	楽になる働き方	△
2/3	100	試されるフェミニズム	△

<2002年度 各号のテーマ>

月	号	テーマ	在庫
4	101	家族をひらく	△
5	102	ジェンダーと人権	○
6	103	力の再定義	○
7	104	ワークシェアリングの可能性を探る	○
8/9	105	からだが一歩!	○
10	106	女性への暴力	△
11	107	生き延びるための知恵—お金と労働	○
12	108	ジェンダーと人権婦人科医療	○
1	109	ジェンダーと教育	◎
2/3	110	ドメスティック・バイオレンス	○

<2003年度 各号のテーマ>

月	号	テーマ	在庫
4	111	ジェンダーフリーを阻む男の病	△
5	112	みんなのフェミニズム	◎
6	113	スキルズ・フォア・ライフ	○
7	114	元気になる性教育	×
8/9	115	<公平>な制度を考える—年金・DV	◎
10	116	子どもが元気になる場所	◎
11	117	暴力を終わらせるために	◎
12	118	DV被害者支援と当事者のエンパワメント	◎
1	119	働く場をつくる	◎
2/3	120	若者の体験空間をひろげる	○

<2004年度 各号のテーマ>

月	号	テーマ	在庫
4	121	地域で取り組む男女共同参画	◎
5	122	女と農とジェンダー	○
6	123	多様性を尊重する性教育	○
7	124	働くことの「現実」と「希望」	◎
8/9	125	支配のテクニクを突き崩せ	◎
10	126	緩やかにつながりあってエンパワメント	◎
11	127	バックラッシュを打ち負かせ	△
12	128	「ニート」と「ひきこもり」	◎
1	129	続・バックラッシュを打ち負かせ	◎
2/3	130	続・続・バックラッシュを打ち負かせ	◎

<2005年度 各号のテーマ>

月	号	テーマ	在庫
4	131	多様性を尊重する教育を	△
5	132		
6	133		
7	134		
8/9	135		
10	136		
11	137		
12	138		
1	139		
2/3	140		

We バックナンバー

『くらしと教育をつなぐWe』12年間の軌跡が凝縮されたバックナンバー。

Weが取り上げてきたテーマは決して古くはなりません。

お手元に欠けている号がありましたらお早めにお申し込みください。

2003年度分までは1冊500円、2004年度以降は1冊680円、10冊以上は割引となります。

◎30冊以上 ○10～20冊 △1～10冊 ×在庫なし

05.4.15日現在

<1992年度 各号のテーマ>

月	号	テーマ	在庫
4	1	くらしと教育をつなぐ	×
5	2	男から男へ	×
6	3	夫婦別姓と家族の再編	×
7	4	学校—絶望?希望?	×
8/9	5	汚れとつきあう	×
10	6	いま、家庭科ホットライン	×
11	7	シルバーからゴールドへ	×
12	8	からだは語る	×
1	9	出会いは歴史をつくる	×
2/3	10	自立と共生のはざまに	×

<1993年度 各号のテーマ>

月	号	テーマ	在庫
4	11	近代教育を超えて	×
5	12	過渡期の男たちへ	×
6	13	家族を疑う	×
7	14	多民族共生社会を生きる	×
8/9	15	地球を救うために	×
10	16	創る—共修の家庭科	×
11	17	性を語る	×
12	18	つながるいのち—死と生	×
1	19	病い・障害を分かち合う	×
2/3	20	しなやかにフェミニズム	×

<1994年度 各号のテーマ>

月	号	テーマ	備考
4	21	家族への郷愁	△
5	22	AIDSと性	×
6	23	男は語る	△
7	24	産むのは私	×
8/9	25	多民族共生社会を生きる II	×
10	26	教育—つながりをとり戻す	×
11	27	自分の福祉を創り出す	△
12	28	食から見える世界	△
1	29	女が働くということ	×
2/3	30	リブの復権	△

<1995年度 各号のテーマ>

月	号	テーマ	備考
4	31	戦後教育—考える病	△
5	32	身体のルネッサンス	△
6	33	ゆらぐセクシュアリティ	△
7	34	家庭科の世界は万葉鏡	△
8/9	35	戦争を語る	△
10	36	民族とアイデンティティ	△
11	37	援助と共生	△
12	38	住空間を考える	×
1	39	装う	△
2/3	40	私のことは私が決める	△

<1996年度 各号のテーマ>

月	号	テーマ	在庫
4	41	学校に風穴をあけよう	△
5	42	自分を好きになるために	○
6	43	性の自己決定	△
7	44	女が元気になるために	×
8/9	45	家庭科が学校を変える	△
10	46	神なき時代を生きる	×
11	47	女性と暴力	△
12	48	“感じること”から始まる人権教育	×
1	49	からだで感じる地球環境	△
2/3	50	女性と自己表現	△

<1997年度 各号のテーマ>

月	号	テーマ	在庫
4	51	新しい人間関係を求めて	△
5	52	母性という罫	×
6	53	いじめ—排除する思想	○
7	54	自立のイメージを探る	×
8/9	55	売春は悪いのか?	×
10	56	住まいとまちづくり	△
11	57	“多様な家族”ってなんだろう?	△
12	58	「先進国」に学ぶ	△
1	59	稼ぐ・働く	△
2/3	60	女性と表現 II	△

購読ご希望の方は、編集部に直接お申し込み下さい。電話、ファックス、E-mail、あるいは郵便振替で○号から購読希望と明記して年間購読料7500円をお振り込み下さい。

- 定価 680円 (本体価格648円+税)
- 年間購読料 7500円 (10冊/送料共)
- 郵便振替00130-7-754314フェミックス

「くらしと教育をつなぐWe」は、もともと家庭科の男女共修の実現のためにスタートした月刊誌ですが、従来の家庭科の枠を超えて、女と男が対等に生きることができる社会の実現のために必要な、さまざまなテーマを取り上げ、特に教育現場において性教育やいじめ防止教育なども包括した「男女平等教育」の実現と、「男女共同参画社会」実現のための具体的なノウハウを追求します。

■2005年度特集

2005年4月号 (131号) 教育の多様性を尊重するために

■連載

魚沼の地から 黒岩秩子◇わがまま映評 満田康子◇乱読大魔王日記 冠野文◇続・ひげのおばさん子育て日記 中畝常雄・治子◇Gender Free Breeze 三浦純子◇リレーエッセイ・地方からの発信◇ひと・まち・NPO 西川正◇女が歳をとるとということ 木村栄

■女と男の家庭科新時代

授業実践/風がかわる匂いがかわる◇新・オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎◇“覚醒”と“自立”のための「ジェンダー論」～女子大での教育経験から 沼崎一郎◇「ひまわり」の日々 入江一恵

◎バックナンバーも販売しています。バックナンバーのリストをご希望の方はお問い合わせください。

■2004年度特集

4月号 (121号) 地域で取り組む男女共同参画/5月号 (122号) 女と農とジェンダー/6月号 (123号) 多様性を尊重する性教育/7月号 (124号) 働くことの「現実」と「希望」/8/9月号 (125号) 「支配のテクニク」を突き崩せ!/10月号 (126号) 緩やかにつながりあってエンパワメント/11月号 (127号) バックラッシュを打ち負かせ!/12月号 (128号) 「ニート」と「引きこもり」/05年1月号 (129号) 続・バックラッシュを打ち負かせ!/2/3月号 (130号) 続・続・バックラッシュを打ち負かせ!

■Weの置いてある書店■

東 京 ●東京ウィメンズプラザ内一パッチワーク

●新宿2丁目一模索舎

●西荻窪一ナワ・プラサード

大 阪 ●ウィメンズブックストアゆう

(書店でご注文の場合は「地方小出版流通センター取扱い」としてお申し込み下さい。)

フェミックス tel & fax 03・3424・3603

〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3サンケイグラウンドハイツ703

http://www.femix.co.jp

E-mail info@femix.co.jp